

教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業 事業報告書

**教職タレント発掘キャラバン**  
**—ダブルインターンシップを軸にした教職キャリア形成の促進—**

横浜国立大学教育学部  
横浜市教育委員会  
神奈川県立光陵高等学校

## 目次

### 1. はじめに

- 1) 教員養成をめぐる課題と教職キャリア形成
- 2) 教員養成にとっての高大接続の意義
- 3) 今、「教員の魅力」を発信する意義について
- 4) 神奈川県立光陵高等学校における教員養成に係る取組
- 5) 教職タレント発掘キャラバンプロジェクトの目的と概要

### 2. 高校生や大学生の教職に対する動機や不安

- 1) 問い続けへの誘い ―教職タレント発掘試案
- 2) 高校生の教職に対する動機や不安
- 3) 教員養成系大学の学生が教員にならない要因

### 3. 高大接続インターンシップ

- 1) コロナ禍におけるインターンシップ活動の困難さと可能性
- 2) 神奈川県立総合教育センターにおける高校生向け教員養成講座
- 3) 神奈川県立光陵高校における出張オープンキャンパス
- 4) 神奈川県立多摩高校における出張オープンキャンパス
- 5) 神奈川県下における教育ニーズに対応した学部改編と課題

### 4. 大学における教職インターンシップカリキュラム

- 1) コロナ禍におけるスクールデー実践 B と C の遠隔実践
- 2) 教員採用試験合格者による遠隔インターンシップの実施

### 5. 教職の魅力発信におけるコンテンツ開発

- 1) 教員の魅力発信動画・リーフレットの作成
- 2) 入職後の教員の困難さを緩和する要因

### 6. 養成・研修の一貫化に向けて

養成・研修の一貫化に向けた教職大学院の改組と深化

## 1. はじめに

## 教員養成をめぐる課題と教職キャリア形成

横浜国立大学教育学部長 木村昌彦

新型コロナウイルス感染拡大は、社会の構造自体をも変化させ、経済・経営、政治、教育環等、様々な日常が失われ学校教育にも大きな影響を及ぼしました。このような過去に例を見ない状況の令和2年度、横浜国立大学は授業をすべてオンラインで実施、課外活動も原則禁止、大学行事もすべて中止とし、明らかに非常事態の1年間でした。そのような中でも教育学部が厳戒態勢を敷きながらも従来通りのあり方で臨んだのが教育実習でした。地域の公立学校、附属学校のご理解ご協力、そして何よりこれらの学校現場が大学を信頼してくださり実現できた令和2年度の教育実習でした。このコロナ禍において、教育実習生を2週間から1ヶ月、学校現場に毎日受け入れるということは大きな決断であったと思います。地域の学校、附属学校には心より感謝を申し上げたいと思います。

この経験から教員養成は大学だけでできるものではないことをこれまで以上に深く実感したのがこの令和2年度だったように思います。大学と地域の学校、教育委員会との間に真の信頼関係がなければ、教員養成課程としての使命を果たすことができないことを改めて思い知りました。教員養成は大学と地域の学校や教育委員会の「協働」の取り組みなのです。社会の変化が激しい現代において、教員養成はこれまで以上に「地域とともにある教員養成」であるべきであり、そのためにも私達は地域で必要とされる教育学部であり続けなければなりません。

もうひとつ、コロナ禍において強く感じたことは、教員養成における「揺るがず変化すること」の重要性です。私達は必要な変化を恐れない組織であると自負しています。一方で、10年、20年先の神奈川の学校教育を見据えた人材育成という大きな柱を揺るがすことなく教員養成に取り組んでいます。

変化には三つの意味があります。いつの世においても変えてはいけないもの、時代と共に変わっていくもの、そして時代の価値に応じて変えなければいけないものです。今見て聞いているものを診て訊いてみる、さらに観て聴いてみると大きく世界が変わってきます。置かれている立場、環境を今一度、見直す事が将来を目指す教員養成には必要だと思えます。子供への弛まぬ愛情、勤勉さ、誠実さ、謙虚さなどいつの時代も教師として変わらず保ち続けるべき資質と、その時々々の社会情勢に照らし合わせながら柔軟に変化・習得すべき価値観、能力・技能の双方を兼ね備えた人材を育成し地域の学校教育現場に送り出すこと、これが本学教育学部の使命と考えています。

全国的に教員養成学部は志願者の減少傾向が続いています。一方で、公立小学校の学級編成を35人に引き下げる「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員

定数の標準に関する法律の一部を改正する法律案」が 2021 年 2 月 2 日、閣議決定され、2021 年度から 5 年かけて 1 クラスあたり 35 人に引き下げられることになりました。また従来からの特別な教育的支援の必要な児童生徒の増加傾向も続いており、学校教員の需要は高まる一方です。大学の教員養成課程で質の高い学校教員を 1 人でも多く輩出することが今後さらに地域から期待されることとなります。前述のように、地域の学校や教育委員会との共同のもと、揺るがず、そして変化を恐れず、そんな教員養成を教職員と学生が一丸となりともに学び成長し合いながら引き続き行なってまいります。

## 教員養成にとっての高大接続の意義

高大接続・全学教育推進センター 高大接続部門長 杉山久仁子

今年度、神奈川県内では小学校教員の募集数は、神奈川県 340 人、横浜市 390 人、川崎市 160 人、相模原市 70 人、合計 960 人、中学校と高等学校及び特別支援学校教員の募集数は神奈川県内で約 1,100 名であり、両者を合わせると約 2,000 人でした。本学部の学生定員は 230 人（令和 3 年度からは 200 人）ですが、令和 2 年 3 月卒業生の教員採用率は 43.0%と国立の教員養成大学・学部の中で最も低く、教員以外への就職率が 40.1%と最も高いという結果でした。教員になる学生の約 8 割は神奈川県内に就職し、その内訳は小学校が約 7 割、中学・高等学校が約 2 割という現状です。

本学部では、以前から教員採用率を向上させるために、様々な取り組みを行ってきました。まずは入試改革。一般選抜の後期日程を廃止して AO 入試（現総合型選抜）を導入したり、推薦入試（現学校推薦型選抜）に地域枠を設けたり、一般選抜の前期日程に面接試験を導入したりなどしました。さらに入学時及び各学年末に進路意識調査を行い、入試改革の効果を調べながら、授業の内容や学外で実習の時期を見直すなどカリキュラムの改革を行ってきました。また、高大接続・全学教育推進センターが実施する高校生授業等体験プログラムに参画し、本学部に入学を希望する県内の高校生を夏休み（8 月）に 3 日間受け入れ、講義や演習なども実施してきました。それらの結果、入学時点での教員志望者の割合（「教員に就職したい」に対して「とてもそう思う」「ややそう思う」と回答した人の割合）は、約 8 割から約 9 割まで増加しました。しかし、学年が上がるるとともにその割合は減少し、3 年間で約 25%減少する傾向が続いています。さらに教員志望であっても教員採用試験を受験するとは限らず、教員採用試験の受験率は約 5 割です。

これまで行ってきた様々な対策は、本学部を受験する高校生の中から教員志望の高い人を選ぶための方策と、大学での学びにおいて教員志望を下げないための方策でした。ここ数年は、さらに県内の各教育委員会の要請に応えるために、小学校や中学校の免許に加えて特別支援学校の免許を持つ学生を増やす、中学校において免許外教科担任の多い教科については複数の免許を取得できるようにするなどの対応も行っています。

今回のこの事業においては、さらに一步踏み込み、大学受験よりももっと前に、いつも身近に存在する教師の仕事を普段とは異なる視点で見ることでその魅力を発見し、教師になることについて考え、高校生の時から教員を志望して学び始める高校生を増やすことを目標に教育委員会と一緒に検討を進めました。多くの課題を抱えた学校現場に対応する資質・能力を身につけるためには、大学 4 年間の学びは短すぎます。すでに実施されている東京学芸大学と東京都教育委員会とが連携した「高大連携による教員養成プログラム」や、奈良県と県内 6 つの教員養成系大学とが連携した「奈良県次世代教員養成塾」などを参考にしながら、今年度の事業をさらに発展させ、神奈川県独自のプログラムが大学と地域の高校と教育委員会の間で構築されることを期待したい。

## 今、「教員の魅力」を発信する意義について

横浜市教職員人事部教職員育成課長 山本 朝彦

近年、様々な業界で経験値によらない「アップデート」が求められており、科学的な実証や第三者評価や視点による「アップデート」が実現できた業界は業績を上げているように思います。すべての業界で優れた人材の確保・育成は重要な資源であるとともに、組織にとって喫緊の課題ともいえます。

横浜市教育委員会においても、毎年、教員採用試験倍率が減少する中、優れた人材の確保・育成は課題となっています。教員年齢の構造的な課題や多忙化の問題、社会の多様な価値観に対応するための様々な教育課題がマスコミ等でもクローズアップされ、この仕事の本質的な魅力が伝わりづらい状況になっているのではないかと思います。教員の仕事は、自分の努力次第では子どもや保護者から感謝の言葉をもらえること、子どもの日々の成長に携われる喜び、子どもの優しさや素直さに出会える感動等、経済的な価値観や労働時間的な価値だけでは測れない魅力があります。こうした魅力をしっかり伝えていく努力が今、求められています。

また、これから生きていく時代は、今までの常識や経験値だけでは解決できない課題が山積んでいます。そうした中では、常に学び続け、常に解答を求めて努力し続ける人材が求められているのであり、教員も学生の養成段階から常に悩み、学び、試行錯誤し続ける、さらに、仕事に就いた後も学び直しができる環境づくりこそ必要です。横浜市は54の大学等との連携協定を結び、大学での養成、採用、育成を一体化して人材育成を図ることを柱に、教育実習、よこはま教育実践ボランティア、大学生の学校インターンシップ、よこはま教師塾「アイ・カレッジ」、採用前研修等の取組をとおして、教員の魅力を発信し、教員を目指す学生の養成に取り組んできました。今後は、採用後の大学のフォロー、その後の教員の学び直しや管理職の育成まで含めた、教員としての生涯のキャリアデザインを考えた人材育成の仕組みが必要です。

こうした課題意識から、連携している54の大学等と共同で、令和元年度には、学校教育の魅力や大学での養成の様子を発信し、教職に興味がある高校生や大学生、よこはま教師塾「アイ・カレッジ」塾生や現役の教職員と情報共有し、交流を深めることができる、取組発表会を開催しました。大学生51名、高校生7名を含む約250名の方が参加し、高校生からは「実際の学校現場の様子が分かり、教員の仕事っていいなと思えた」「教員になるためにはどのようなプロセスで、何を学んでいけばよいか分かり、ためになった」といった声が寄せられました。

この取組から、できるだけ早い時期から教職への関心をもってもらうことが、本市の課題解決につながる一つの方策となるのではないかと考え、令和2年度は、中学生・高校生を対象とした、教員の魅力を伝える映像コンテンツ及びリーフレットを横浜国立大学と共同で制作しました。

この動画は、主人公となる高校生が教員の日常を体験することを通して、知っているようで知らなかった教員の仕事内容を詳しく知り、日々、教員が大切にしていることや子どもへの思いを捉えていきます。高校生目線で発信することで、動画を視聴する中学生・高校生に対し、学校や教員の仕事への興味・関心を喚起できるようにしました。さらに、中学校や高校のキャリア教育に生かしてもらえるように動画と学習シートも作成しました。今後は、市立中学校や高等学校の授業の中で活用し、生徒自身の将来の選択肢の一つとして活用してもらう予定です。

今後は、教職の魅力を教育委員会も積極的に発信し、学校の中で日々繰り広げられる感動や魅力を多くの人に伝えていく必要があります。また、教育の方向性や取組を丁寧に説明し、保護者や地域の人々、多くの市民にしっかり説明していく責任があります。早い段階から教職の魅力ややりがいを伝え、あこがれをもって教職の道に進んでもらえるよう、教員養成課程のある地元の横浜国立大学との連携を一層深め教育委員会もしっかりと責任と役割を果たしていきたいと考えています。

# 神奈川県立光陵高等学校における教員養成に係る取組

神奈川県立光陵高等学校 小島淳子 蘇武和成

## 1 趣旨

高等学校段階における教職希望者に向けて必要な支援を行い、高い意欲を持って教育学部等の大学に進学する生徒を育むとともに、地域で働く質の高い教員を確保し、神奈川県の中高等教育に係る教育力向上を図る。

## 2 教員養成に係る現状と課題

神奈川県の教員採用試験における志願者の減少等の課題があるため、地域の教育力をより向上させていくための手立てが必要である。

## 3 課題解決に向けた手立て

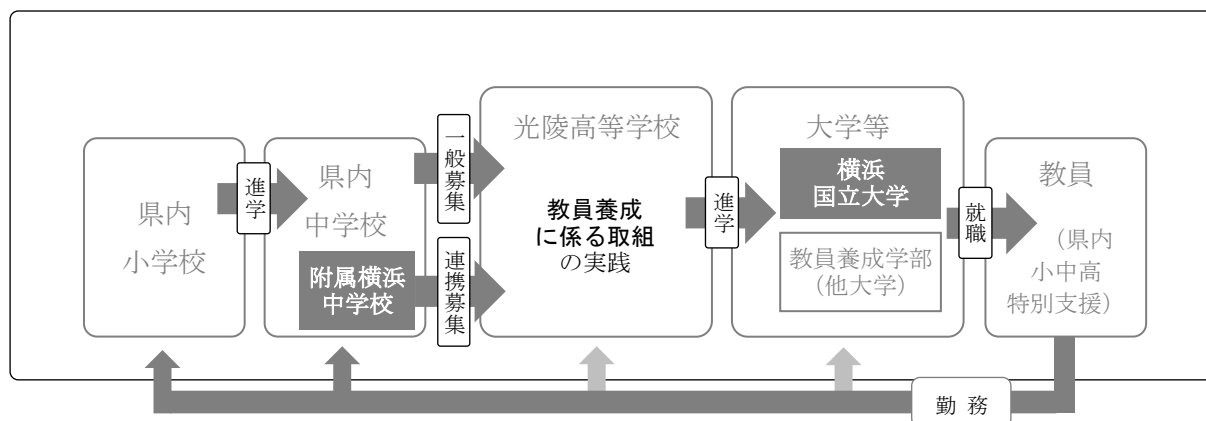
教職を志す生徒の支援を行うとともに、地域の教育力の向上に向けて、次の手立てを講じる必要がある。

教員としての資質・能力を高等学校段階から育成し、必要な支援を行っていく。

## 4 光陵高等学校における状況

- 平成19年に発表となった「実施計画」に基づく横浜国立大学、光陵高等学校及び同大学同学部附属横浜中学校との中高大連携事業の一層の推進を図っている。
- 光陵高等学校の志す生徒像である「心やさしき社会のリーダー」の育成を図っている。
- 教職を希望する生徒が多く（神奈川県立総合教育センター主催の県内全域の高校生を対象とした「教職セミナー」への参加者が他校と比較して非常に多い）、横浜国立大学との連携の趣旨を生かし、当該生徒の支援を強化している。
- 近隣の特別支援学校への実習や、中高大連携に係る多くの教育実習生の受入れ等の取組を以前から行っており、これらを含めて教員養成につながると思われる多くの取組をすでに実施している。
- 教職を意識して物事を捉える視点を持つことは、他の進路を志す生徒にとっても意義があるため、本取組を一層充実していく必要があると考えている。

## 5 教員養成に向けたサイクル





## 6 取組の具体

### (1) 教員養成に係る科目（学校設定科目）の設置及び開講

- 新たな学校設定科目「教職基礎」を設置（新たな学校設定教科「キャリアデザイン」の中に位置付ける。）し、令和3年度から開講する。

科目名	教科名	単位数	履修形態
<u>教職基礎</u>	キャリアデザイン	1	第1・2学年選択
科目の目標	教職を志望する生徒に対し、キャリア教育の一環として、外部機関が主催する講座の受講、各種講義及びグループ活動等を通して教職への理解を深め、その資質・能力や意欲の向上を図る。		
科目の内容	総合教育センターが主催する「高校生のための教職セミナー」の受講、横浜国立大学教育学部と連携して行う様々な取組（特別講義の受講や教育実習生又は教職大学院生とのワークショップ等）及び近隣の小・中・特別支援学校との連携による教育体験実習の実施等を通して、教職を志望する上で必要な資質・能力や意欲の向上を図る。		

- 指導計画（予定）の概要は次のとおりである。
  - ・教職に関する基礎知識の学習
  - ・「高校生のための教職セミナー」受講のねらいの確認と振り返り
  - ・「高校生のための教職セミナー」受講（1講座2時間×8回 総合教育センターにて）
  - ・横浜国立大学教育学部学生（教育実習生・教職大学院生）とのワークショップ
  - ・横浜国立大学教育学部教職員による特別講義
  - ・近隣の小・中・特別支援学校での教育体験実習
  - ・学習成果発表会
- 今後の展開については、「教職基礎」を更に発展させ、より深く学びを進めるための上位科目の開発とその設置及び開講を目指す。

### (2) 一般の生徒について

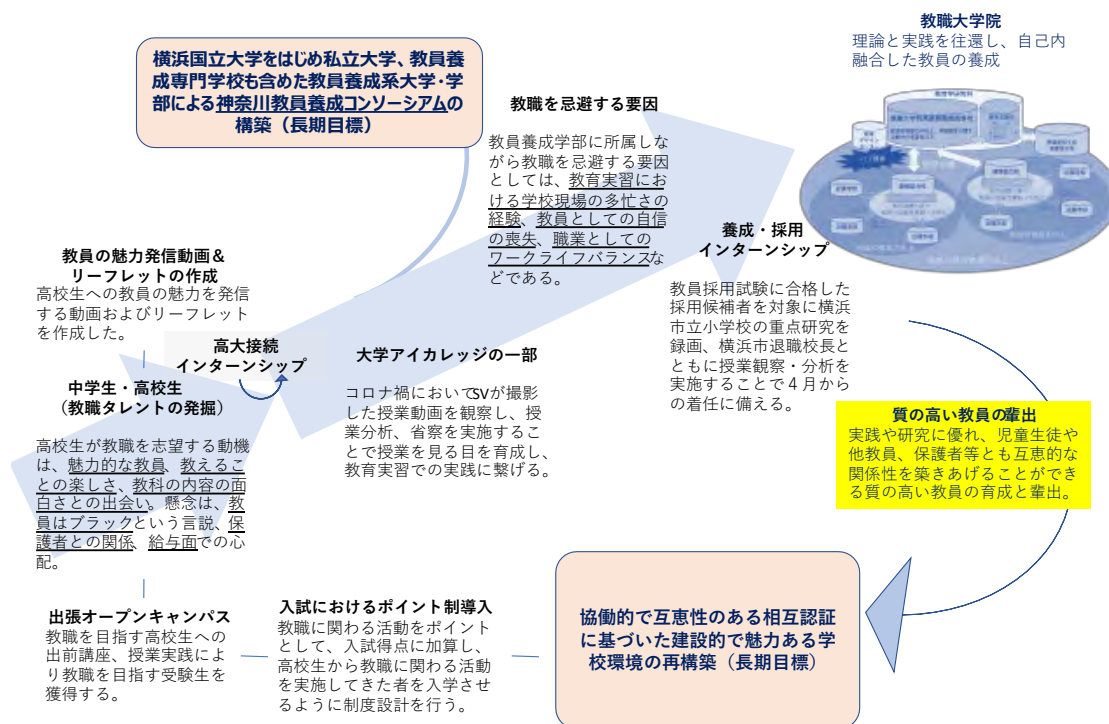
- 光陵高等学校との連携事業を行っている横浜国立大学から、教育実習生や教育インターンを受け入れ、生徒との交流の場を作っている。
- 1年時に、生徒全員が近隣の保土ヶ谷養護学校における交流活動を半日程度行っている。
- 近隣の横浜市立権太坂小学校とは、放課後キッズクラブとの交流や児童への絵本の読み聞かせなども行ってきたが、今後一層交流の機会の充実を図っていく。

## 教職タレント発掘キャラバンプロジェクトの目的と概要

横浜国立大学教育学 物部博文

本プロジェクトは、高大接続インターンシップ、養成・採用インターンシップという2つのインターンシップを軸として高校・大学・教育現場を繋ぐことで、神奈川県下の教職をめざす人材を発掘するとともに、教員養成から採用までの学びを見通せるカリキュラムの創発を目的としている。コロナ禍において制約がある状況下において、高大接続インターンシップに関連しては、教員を志望する動機についての調査・分析、出張オープンキャンパス等の実施、教員の魅力発信動画およびリーフレットの作成を、教員養成課程に関連しては、コロナ禍における遠隔でのスクールデー実践（大学アイカレッジの一部）の実施、教職を志望しない教員養成系大学生の要因の調査・分析を、養成・採用インターンシップに関連しては、教員採用試験に合格した学生を対象に横浜市立小学校の重点研究等を録画、SV（スーパーバイザー・横浜市退職校長）とともに授業観察・分析を実施することで4月からの着任に備える試みを行った。

実践と理論を往還しつつ、その自己内融合を図れるような教員、授業実践や研究に優れ、児童生徒や他教員、保護者等とも互恵的な関係性を築きあげることができる質の高い教員の育成と輩出により、長期的には教育現場を魅力的な職場環境へと変革するとともに、多様で魅力的な授業実践等を展開する教員達を身近に見て、児童生徒が教職を目指すような循環を目指したい。



2020年度 教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業（教職の魅力向上に関する取組）  
教職タレント発掘キャラバンーダブルインターンシップを軸にした教職キャリア形成の促進

## 2. 高校生や大学生の教職に対する動機や不安

## 問い続けへの誘い ―教職タレント発掘試案

有元典文

「どうしてこんなに先生にならないのか？」という問いをよく教職員同士で話し合う。本稿はそんな問い合い、議論、おしゃべりで思いついたことをまとめたものだ。会議で、廊下ですれ違いざまに、LINE グループで、真面目に、そして冗談まじりに、話し合うという共同作業の最中で思い浮かんだことを記録しておく。

同じ大学に永くいると、問いの意味すら変わってくる（私の在学中の、80年代、少なくとも心理科では、この問いは問の形をとった心理学徒としてのプライドの表明だった）。答えを出す基盤も変化しつつある。

問と答えは、変化しつつある状況と共にある。問の意味が変わり続ける中、永遠の答えなんてないのだから、問い続け、相談し、答えを求め続ける共同の姿勢の方が大事だろう。本稿はそうした問い続けという共同作業への誘いだ。

### (1) 教職一本槍を探せ

90年代の初頭に、学習心理学に革命が起きる。「正統的周辺参加の理論(LPP)」の登場である。革命というのは革命だと信じる人間にしか革命ではないので、私には革命でもこの概念を聞いたことのない方が多数だろう。

「徒弟制をモデルとして提唱された学習論。「学習」を個人内での知識獲得としてとらえるのではなく、何らかの価値観を共有した実践共同体への参加としてとらえる立場」（松嶋秀明, 質的心理学辞典より）

ここでは学習者とは「新参者」であり、「あんな古参者みたいになりたい」という想いで実践共同体に参加してくる。目指すあんな人になること、というシンプルだが強烈な動機づけに支えられた、この参加の社会的プロセスの効果は絶大で、誰もが一人前の実践家になれる、というのがこの理論の主張である。心理学実験や学校での勉強のような「学習」は、こうした参加の社会的プロセスのごくわずかな断片、サブセットにすぎない、というわけだ。

誰かになるための参加なので、動機づけについては考える必要がない。例えばイチローに憧れて野球部に入る、というようなことをイメージしてほしい。学習と呼ぶよりももっとずっと物語的な、個人の長い参加の旅がこの理論の見渡す「学習」である。

さて、そんなふうに憧れて、野球をしたくて野球部に入った子が、数年の部活経験で以下のようなことを言うに至るだろうか。

「他にもたくさんスポーツがあるから、自分の他の可能性を試してみたい」

「世間では野球はキツイと言われてるので続ける自信がない」

「試合での責任あるポジションは自分には荷が重い」

まだろくに大会にも出たことがなく、仲間内の練習試合程度の経験しかないにも関わらずである。

これは本学部の6割の、教職につかない学生の例え話である。詳しくは、本報告書の高校生調査（「高校生を対象にした教職志望へのきっかけ、教員の魅力と不安」）と一般就職者意見聴取（「教員養成系大学の学生が教員にならない要因」）の分析を見比べていただきたい。憧れて教育学部に入學したにも関わらず、少なからぬ者が上記の例え話とほぼ同じような理由で教職志望ではなくなってしまう。

現に今、野球をしていて、これからもしたいと思っている者とは、自らのその「なりたい」という熱い思いに懐疑を持たないものだ。

「自分はなぜ野球をしているのか」

「自分には野球は向いているのか」

こう言うことを野球をしている最中に考えると言うのは、情熱が足りない。危うすぎる。適性への懐疑は実践家にとって成長のよすがになるだろうが、それは成長、発達を目指すものにとってのみにすぎない。

本学部の状況は、野球をするかどうかはわからない者と野球したくない者（！）と、野球したい者をまとめて、野球選手にしようとするかの如くである。野球したいものはたくさんいるのだ。キラキラと前向きに、誰に何を言われようと、野球をしたい思いに疑問を持たないものが野球をすれば良い。

教師も同じく、キラキラと前向きに、疑うことなく、一本槍に教職を目指すものが教職につけば良い。ここは教育学部の教員養成課程なのだから、存在や適性への懐疑を持ったもの場所ではない。教育学部の教員養成系課程に入って、自分探しをするのははっきり言って間違っている。教員志望ではないが偏差値が手頃なので入學した（！）、と回答しているものは論外だ。

運転免許を取るか迷っているものが、そのために自動車教習所に通ってみることに、確かに意思決定のための幾ばくかの意味はありそうだが、わざわざ誰も勧めないだろう。それは自動車教習所の主たる機能ではないからだ。同じく、教員養成課程に入學して「どんな教師になるか」と考えるのは素晴らしいことだが、そもそもの「教師になるかどうか」を考えるのは、教員養成課程の趣旨とはズレている。

キラキラと前向きに疑うことなく教師を目指す高校生はたくさんいるのだ。教職一本槍でそんな自分を疑わない者に集まってもらいたい。

### (2) やり方を知らないことを支え合うのが楽しみな者を探せ

私の担当する学部2年生必修の教職科目「教育の心理学」では、グループワークに力を入れている。教職とはグループワークであり、教育の潮流はグループワークであり、社会・生活・人生とはグループワークであり、そもそも学部の求める学生像が「子どもとコミュニケーションをとりながら共に学び続けたい人」「他者と協働して広い視野に立った解決策を構想し実践したい人」とグループワーク的だからである。

ところがグループワークが苦手な学生が恐ろしく多い。苦手なことを無理強いしては「教育において無理強いしても良い」と教えることになるので、無理強いはできない。グループワークするものと個人ワークで進めるものを毎回、自己決定してもらおう。するとグループワークするものは2割、個人ワークを選ぶものが8割に分かれるのだ。授業アンケートやレポートをみて、また個々に話を聞いてわかるのは、「人前でやり方を知らないことをすること」を嫌う学生がこの8割を構成していると言うことだ。言い方を替えれば、「出来るようになってからしか人前でしたくない」者が多い、と言うことになる。

しかし「できるようになってからやる」などというのは昭和の教育、学習、能力観である。今の教育潮流では、「やり方を知らないことを支え合うことを学ぶ」のだ。とっくの昔にこちらにシフトしている。今は、共に学び続けられ、他者と協働していける人材が求められている。やり方を知らないことを支え合っていく共同が好きで、そのことをこそ楽しく感じる者に集まってもらいたい！

### (3) 主客未分・一座建立で共に発達しようとするものを探せ

良い茶席とは、主人のもてなしだけでもなく、客のふるまいだけでもなく、両者の関わり合いで成り立つことを「主客未分」というらしい。同じ意味で「一座建立（いちぎこんりゅう）」という言葉も見つけた（そのまま英訳すると「チーム・ビルディング」になるのも気に入っている）。これは教育実践にも当てはまることだと思う。良い学びとは、教師による教授によってだけでなく、児童生徒による学習によってだけでなく、教授と学習が一体となった共同作業、教師と児童生徒のグループワークによって成立するからだ。

仲間や教師と共に支え合い、独力ではできないがみんなだと出来る場のことを、ヴィゴツキーは「発達の最近接領域（＝自分の未来に最も近づけるゾーン）」と名付けた。その領域（ゾーン）では、みんなを支え合うことで独力以上のことが出来る。教育とはこのみんなだと出来るゾーンを構成することだ、とヴィゴツキーはいう。

なぜなら教育には答えがない。多様な子供達と、状況と、様々な教科の色々な単元の組合

せに、教え方・学ばせ方・学び方の最適解はない。教育とは、その場の皆が、その場が育ちの効果を持つように一緒につくり育てていくグループワークなのだ。教育とは、子供の発達を支えるために、教師自身も含む皆が発達するような場（発達環境）づくりをし合うことである。自分だけは学習圏外、発達圏外に身を置いて、自分だけは無謬で、自分だけは変わらない、なんていうことは成り立たない。自分も当事者として、一緒に発達環境を創る人が先生になってほしい。

#### （４）教職タレントを発掘しよう！

教職に就く学生とは「教職に就くと決めている学生」ではないか。能力や適性の有無、高低ではなく、「なると決めていること」が決め手なのではないか。教職に就くと決めている人は、能力や適性が低かったり無くても頑張るものだ。野球が好きでずっと野球を続けている人を思い起こしてほしい。好きで続けるためには、必ずしもうまい必要はない。下手の横好きでも、それはむしろ高い動機づけがあるということだろう。

教職タレントを発掘しよう。そのためには教職関連スキルの体験プログラムで様子を見てはどうだろう。パフォーマンス的で、体を使い、即興的、対人的、共同的なプログラムを課すのだ。

「やり方をすでに知っていることを独力で上手にこなすこと」は、ここで診たいタレントではない。「やり方を知らないことを皆で支え合うのが好きなこと」こそがタレントだ。

「能力が高く、人に教えるのが好きなこと」も、ここで見つけたいタレントではない。学力の高い子とは、一人でやる作業の得意な子にすぎない。「自分も発達の当事者として、子供達と一緒に発達しようとする」こそがタレントだ。教職一本槍で、やり方を知らなくても皆で挑戦して、そのことでみんなで発達しようとするのが、大切な教職タレントということになる。観点として、まじめに、諦めずに、周りと同じし、挑戦し続けるか？ということを見てみたい。同時にこういうプログラムが志望者の関門、フィルターにもなることが期待できそうだ。

以上、正統的周辺参加の理論を援用しつつ、「先生になりたいものを集めて先生に育つ場をつくらう」、という当たり前の結論をお伝えした。やりたくない人に良さを伝えてもダメ、とまでは言わない。それでも繰り返すが、自動車教習所で運転したくない人に運転の良さを伝えたりはしない。それは明らかに志望のミスマッチだ。

と、ここまで書いて、ちょっと目的養成重視の姿勢が出過ぎかなとも思う。なんかの拍子にこれを読んだ非教職志望の学生や、一般就職した卒業生に、あなたたちの志望はミスマッチで大学生活は間違いでした、と言っているのに等しいではないか。入学させておいてそれはあんまりな話だ。おまけにその昔、「在り方懇」が打ち出した目的養成重視の姿勢に、大

学は大学で専門学校じゃない、と一旦は思ったくせになんだろう。

ここで、前掲の「正統的周辺参加の理論」には続きがある。

「(参加には、) 実践共同体に参加しないという「非参加のアイデンティティ」や、そこで「隙間の共同体」を形成すること、参加できないと感じられる「周縁性」が経験されることなど、参加のあり方は多様である。」(松嶋秀明, 質的心理学辞典より)

例えば、心理科に入ってきて、教員養成の講義を受け、教育実習を経験して、さて就職の前に適性や志向を天秤にかけ、教員か心理支援かどちらを選ぶかと考えることは、個人の大事な選択だ。それ以上に、教育実践のためにも重要な気がする。教育という実践共同体において、その周縁の「隙間の共同体」も必要不可欠で、例えれば、隙間が埋まることで面はしっかりと安定した面を構成する。こうして教育実践を支援する人材が教員養成の中から養成されることはかなり重要だと思う。学校の価値と方法と実践を体験した上でその支援に回る人材は、学校を知らずに専門養成されたものよりも、教育実践との共同作業が容易である。

世の中に、そして大学に余裕があれば、同じトレーニングを受けた上で、教員ではなく「教育を支援する立場」に回る人材を輩出することは、この地域の教育を強靱にするだろう。目的養成が重視される中で、無理は承知で、この余裕についてかなり意義があることだ、と付記しなくてはならないと思に至った。

無理矢理な例え話だが、精米歩合という言葉をご存知だろうか。米を磨いて残った部分の割合のことである。吟醸酒は精米歩合 60%以下に、大吟醸酒は 50%以下に精米すると定義されている。教職一本槍ではない、多様な学生が集まる本学教員養成課程は、多様な特徴をもったものたちが4年間、教員養成のトレーニングの中でインタラクションを続け、精米歩合4割の酒を生み出している。

エンジェルズシェアという言葉をご存知だろうか。ウイスキーは樽で寝かされるうちに、年間でだいたい2~3%、10年だと全体の18~34%が、揮発する。これをもったいないと捉えるか、意味のある現象だと捉えるか。エンジェルズシェア、つまり天使に分け前をふるまうことで、酒の味を高めてもらっている、というのがこの語義である。

教員養成に酒の話もおかしいかも知れないが、留まらぬものたちが留まるものたちを深め、強め、純化させる学習環境になっていたらどうだろう？生物多様性で例えれば、こうした多様なインタラクションがあることが、国大教員養成課程の強みだったかも知れないのだ。

私たちはいつもこんな話をしている。本報告書を目にして、思うところがあれば、いつでも連絡してきて欲しい。答えのないことの間い続けを皆でしていきたい。



## 高校生を対象にした教職志望へのきっかけ、教員の魅力と不安

横浜国立大学 物部博文、鈴木雅之、梅澤秋久、泉 真由子、有元典文

### 1. 調査の背景と目的

経験の浅い教員がミドル層へ移行するのに伴って産休等が増加している。加えて、神奈川県外出身者が親の介護や婚姻によって県外異動するケースも見受けられる。その一方で、一般企業の採用拡大、教員＝ブラックというイメージの広がりなどから全国のみならず、神奈川県下においても、特に小学校を中心にした教員採用試験の倍率低下が生じている。

この課題に対する神奈川県内における人材発掘の必要性から神奈川県内の教職を志望する高校生を対象に調査を実施し、教員の魅力、教員になることの不安や懸念を明らかにすることを目的とした。

### 2. 調査方法

#### 1) 調査対象

神奈川県立総合教育センター「高校生のための教職セミナー」参加者 130 名、神奈川県立光陵高等学校「横浜国立大学出張オープンキャンパス」参加者 54 名、神奈川県立多摩高等学校「大学出張講座」参加者 64 名の合計 248 名であった。

#### 2) 調査日時

神奈川県立総合教育センター「高校生のための教職セミナー」は 2020 年 8 月 30 日、神奈川県立光陵高等学校「横浜国立大学出張オープンキャンパス」は 10 月 1 日、神奈川県立多摩高等学校「大学出張講座」は 11 月 30 日に実施した。

#### 3) 調査内容

調査内容は、あなたの教員志望度を、「絶対に教員になりたい」、「教員になりたい」、「やや教員になりたい」、「教員にはなりたくない」の 4 件法で、あなたの志望する学校種と教科、教員を志望するようになったきっかけ（時期、人との出会いや出来事）、教員の魅力、魅力と感しない点や、教員になることに対する懸念などについて自由記述形式で回答を求めた。

#### 4) 分析方法

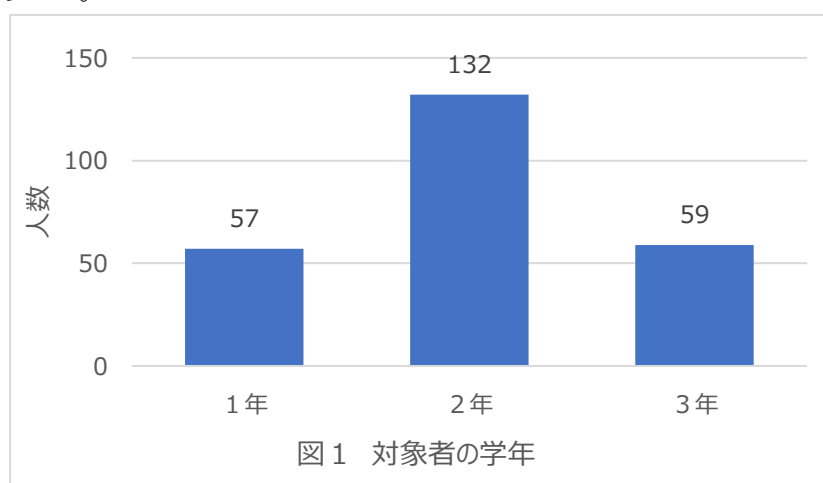
分析は、数量データについては IBM SPSS Statistics25 をもちいて単純集計を、自由記述については、記述内容に基づく分類と KH コーダーを用いて共起ネットワーク分析を実施した。

### 3. 結果と考察

#### 1) 対象者の基本属性

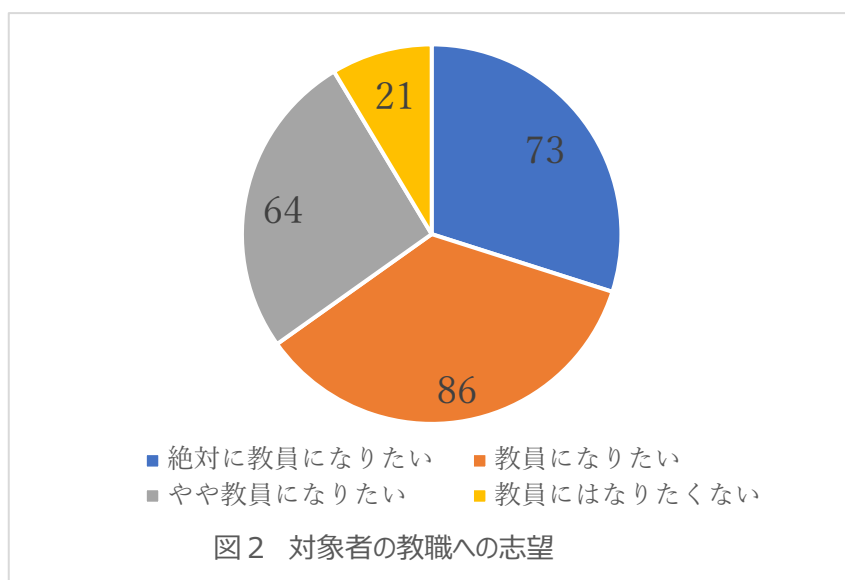
##### (1) 対象者の学年

対象者の学年を図1に示した。1年生が23.0%（57名）、2年生が53.2%（132名）、3年生が23.8%（59名）であった。



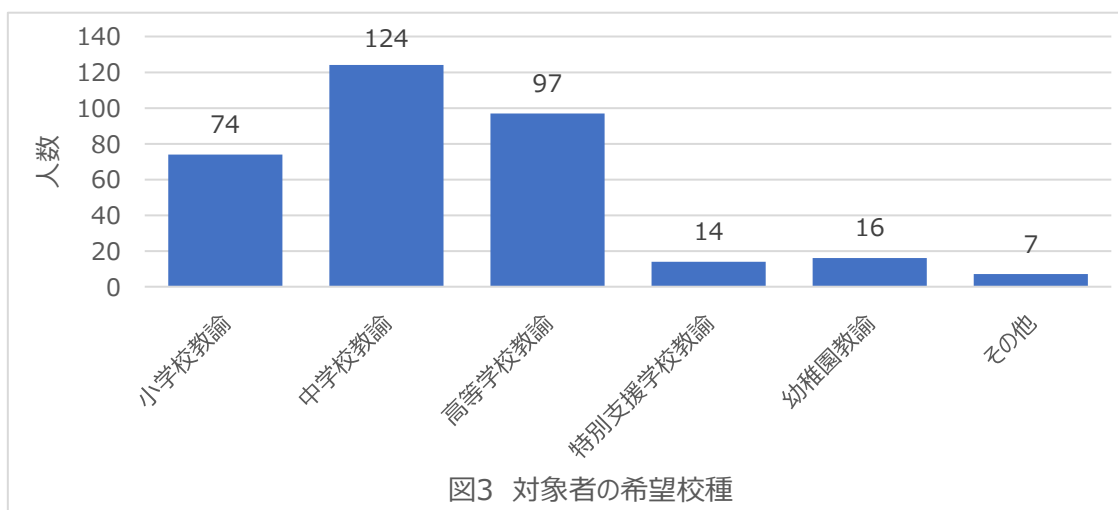
### （2）教職への志望

対象者の教職への志望について図2に示した。教員になりたいが最も多く34.7%（86名）、絶対に教員になりたいが29.4%（73名）、絶対に教員になりたいが29.4%（73名）、やや教員になりたいが25.8%（64名）、教員にはなりたくないが8.5%（21名）であった。



### （3）希望校種

対象者の教職希望校種（複数選択）を図3に示した。中学校教諭が最も多く50%（124名）、高等学校が39.1%（97名）、小学校が29.8%（74名）、幼稚園教諭が6.5%（16名）、特別支援学校が5.6%（14名）であった。その他は2.0%（7名）で養護教諭と図書館司書であった。



## 2) 教員を志望するようになったきっかけ

教員を志望するようになったきっかけ（時期，人との出会いや出来事）の分類を表1に示した。

「小学生のころ、担任の先生が生徒1人1人と向きあってくれて、学校に行くたのしさを教えてくれたから」、「中学2年生の時、委員会や部活で行き詰まったときにたくさん話を聞いてくれたこと」、「中学の時の担任の先生の影響です！それと、高校での担任の先生の授業のやり方がとても良く憧れた！」、「小学校の授業内で問題が解き終わった生徒が解き方がわからない生徒に教える時間に物事を教えた時のよろこびを感じたから」などの「教員との出会い・エピソード」が最も多く120、「中学2年の職業体験で先生になって生徒と接する楽しさを知ったから」、「中学校の頃、人と関われるような職業につきたいとっていて、特に子供や、教えることが好きなので、目指そうと思いました」などの「人との関わり教えることの楽しさ」が20、「高校2年生のときに幼稚園のインターンシップに参加し、子どもと関わる仕事に魅力を感じた」、「中学校での職業体験で学校へ行った際、子どもから小さい折り鶴をもらって嬉しかったこと」、「高校の部活で小学校に行く機会があり子供たちの姿を見るうちに学校で働きたいという思いが強くなったから」などの自身の経験や環境等が17、「もともと読書が好きで、高校に入学し、国語の先生の授業をうけ、私も先生になりたいと思いました」、「高校で、世界史、政治・経済に面白みを感じたこと」、「美術が好きで、毎日、芸術にふれて、おもしろさを知ってもらいたい」、「中学生のときから社会が好き」などの「内容の面白さ・楽しさ」が10、「テレビで貧困によって勉強がしたいのに出来ない子供が多くいると知って、そのような子供達に勉強を教えてあげたいからです」、「中学の時に勉強が苦手とても苦労した事があるので自分と同じようにこまっている人を助けたいと思ったのがきっかけです」などの「課題のある状況への問題意識」が7、「勧められて」が3、「その他」が3切片であった。

表1 教員を志望するようになったきっかけの分類

分類	数	記述例
魅力ある教員との出会い や教員による支援の経験 等	120	小学生のころ、担任の先生が生徒1人1人と向きあってくれて、学校に行くたのしさを教えてくれたから／中学校1～2年のときに担任だった教師の授業をしているときの楽しそうな姿を見て／小学校の頃の担任の先生が大好きだった／小学校の担任の先生との出会いと先生に中学生になってからもお世話になったこと
人との関わりや教えること の楽しさ	20	自分が周りの人たちに勉強を教えていて楽しいと思ったから／中学校の頃、人と関わられるような職業につきたいと思っていて、特に子供や、教えることが好きなので、目指そうと思いました／勉強を教えたとき、「ありがとう」といわれるのが嬉しいから
職業体験や自身の経験・環境 等	17	高校2年生のときに幼稚園のインターンシップに参加し、子どもと関わる仕事に魅力を感じた／中学校での職業体験で学校へ行った際、子どもから小さい折り鶴をもらって嬉しかったこと／高校の部活で小学校に行く機会があり子供たちの姿を見るうちに学校で働きたいという思いが強くなったから
教科・学習内容等の興味・ 楽しさ	10	もともと読書が好きで、高校に入学し、国語の先生の授業をうけ、私も先生になりたいと思いました／高校で、世界史、政治・経済に面白みを感じたこと／美術が好きで、毎日、芸術にふれて、おもしろさを知ってもらいたい／中学生のときから社会が好き
課題のある状況への問題 意識	7	テレビで貧困によって勉強がしたいのに出来ない子供が多くいると知って、そのような子供達に勉強を教えてあげたいからです／中学の時に勉強が苦手でもとても苦労した事があるので自分と同じようにこまっている人を助けたいと思ったのがきっかけです
教員等からの勧め	3	中学校の担任の先生（部活の顧問の先生）に、先生になってみたら？と言われた
その他	3	

### 3) 教員の魅力、魅力と感じない点や、教員になることに対する懸念

教員志望度別にみた「教員の魅力、魅力と感じない点や、教員になることに対する懸念」の共起ネットワークを図4～6に示した。

「絶対に教員になりたい」群の共起ネットワークを図4に示した。図の中心に「教員—魅力」、「仕事—楽しい」が表出した。また、「変える—責任」、「心—触れる—経験」、「深い—人生」、「一緒—見れる」、「変える—責任」、「良い—悪い影響—担う」などの教員の意義に関連する内容が表出していた。一方で、「重要—職業—ブラック」などから教員をブラックな職業と認識している状況が表出していると考えられた。

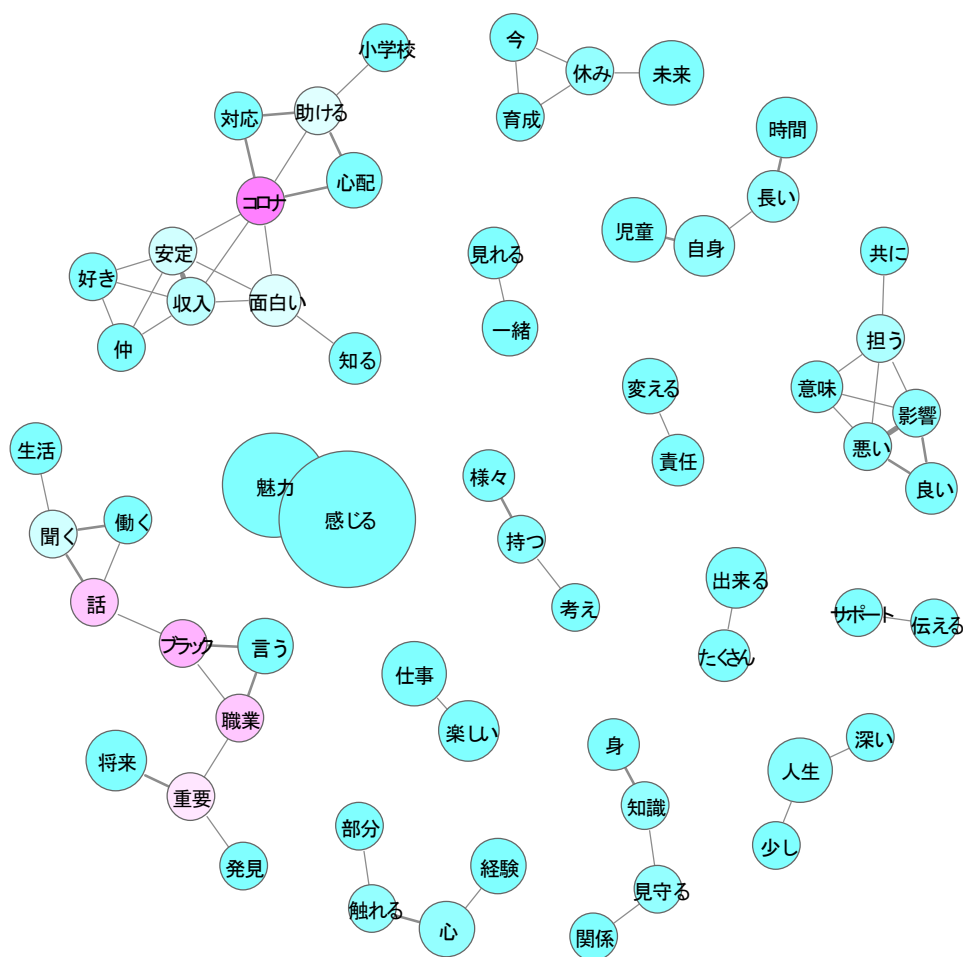


図4 「絶対に教員になりたい」群の共起ネットワーク

具体的な記述例としては、「“教える”立場でもあり“教えられる”立場が魅力」、「子供達から学ぶ。人との関わりが絶えないこと。毎日同じ1日がないこと」、「仕事を通して子どもたちや教育のあり方を探究できることが魅力だ。また、やりがいも大きいと感じている。しかし、労働環境や部活等などが忙しいのではないかと懸念している」、「生徒と共に自分も、新たな発見や学びをすることができる。安定した収入がある。コロナのようなことがあっても

あまりお金の面で心配することがない。自分にはない考え方ということを知れる場（子どもだからこそ）であり、とても面白いと感じる」、「子どもと関われる。コミュニケーションの場が多い。生徒や児童だけが成長するのではなく、自分自身も成長することができる」、「学ぶことを楽しいと感じさせられること。教えることで自分のことに対する新しい発見。将来に関わる重要な仕事であること」、「ただ、勉強を教えるだけじゃなく、生徒の未来を育てることができること」、「未来をつくり上げる人材の育成に携さわる事ができる点。魔法使い（九九など今でも覚えているような事はほとんど小学生で習ったことであるから）。休みとれるのか」などであった。

「教員になりたい」群の共起ネットワークを図5に示した。図の中心に「生徒一先生」、「魅力一思う」が表出した。また、「自身一学べる」、「進路一携わる」、「学び一コミュニケーション」、「新た一選択肢」などの教員の魅力や意義に関連する表出した。一方で、「保護不安一嫌う」、「部活一残業」、「授業一準備」など懸念についても表出していた。

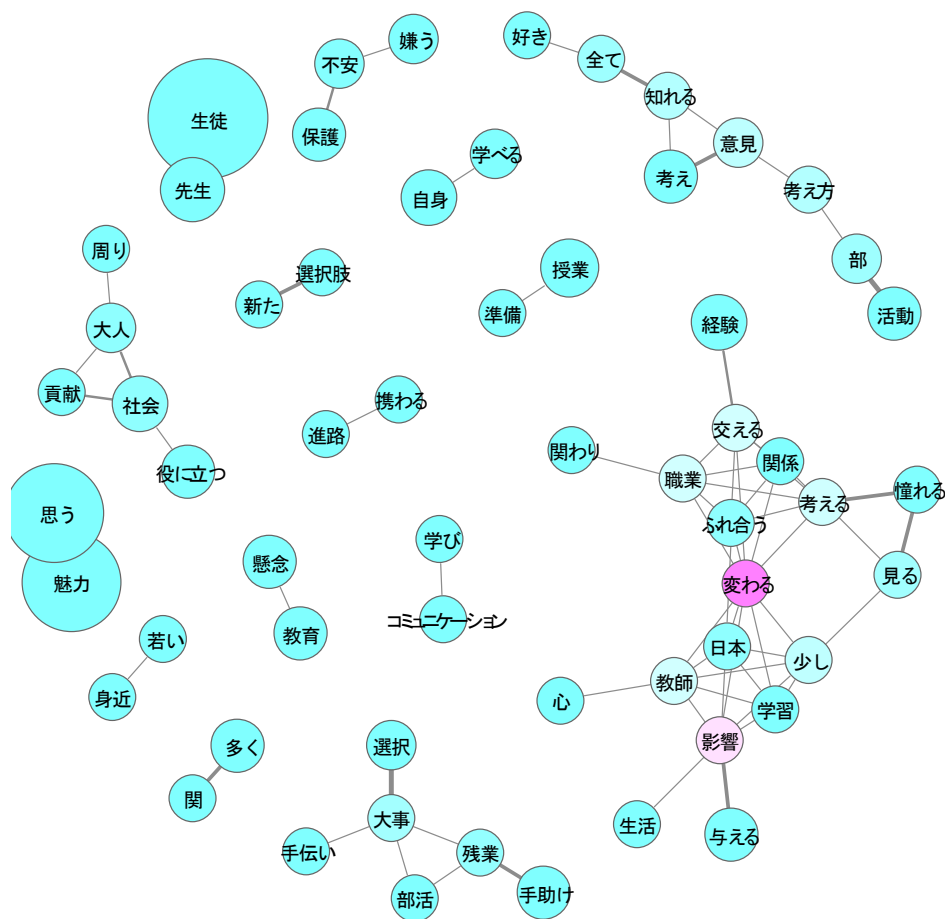


図5 「教員になりたい」群の共起ネットワーク

具体的な記述例としては、「生徒にとってとても大事な選択の手助けをすることができる。業務時間が長い、残業代、部活等による交通費が自腹など」、「生徒の人生を左右してしまう



具体的な記述例としては、「若い人と触れ合える点。成長過程を見られる点。教育の形を変えられる点。(懸)給料、退職、転職について」、「毎年違う子どもたちと関われるところが魅力。とても忙しそうに見えてしまう」、「子どもの未来や、成長を間近で見ることができること。子どもに勉強をやらせている感じがする」、「人と関われる面。自分の体験や会話を通して人を成長させられる点。なんであんなつまんなような授業をするのだろう」、「1人でこれからの未来を支える学生に授業をする所に魅力を感じるが、社会経験がないまま教員になるのに懸念がある」、「魅力・教えた事を生徒が学び育つ様子が見られること。生徒に教えるだけでなく、自分も生徒から学べる点。自分の働きが生徒の役に立ってくれる点」、「生徒との関わりがもてる。自分が教えて、生徒が「分からない、教え方が悪い」と言われぬか」、「未来を担う人の将来に関わることができる、その分責任が重い。学級崩壊など精神的苦痛が大きくなってしまふことがある」、「自身の教え子の成長を見ることができる。人の将来に携わることができる」、「数学が好きなので仕事で関われることは魅力だが、給料に少し不満がある」、「クラスで協力して活動する時。先生の経験を話してもらった時、楽しかったし印象に残った。皆に平等に接せる自信がない」、「人に教える、学ばせるということは素晴らしいと思う。FYを経験しているので少しブラックかな?ともみえる面も」、「人を創れる。教育のバトンをつなげる。ブラックだと聞く。魅力…子どもとの関わりが楽しそう。魅力と感ぜぬ点…かなり大変そう」などであった。

「教員になりたくない」群の共起ネットワークを図7に示した。「大変」、「難しい」、「忙しい」のように内容が多く表出していた。



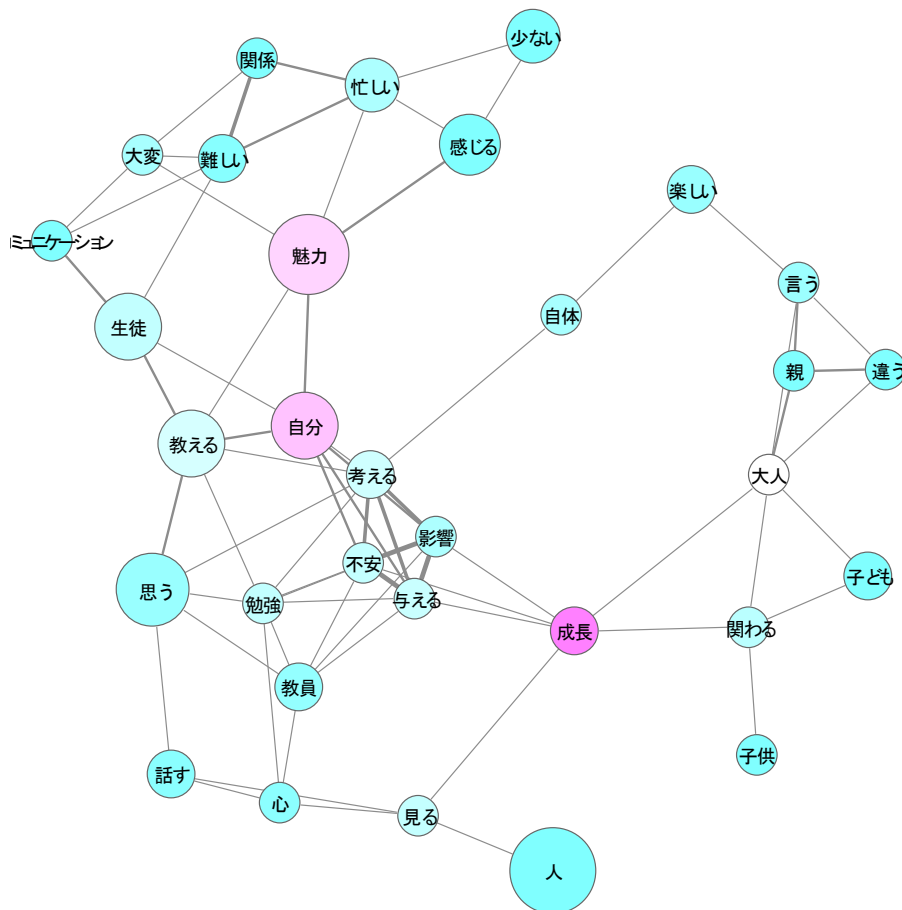


図7 「教員になりたくない」群の共起ネットワーク

具体的な記述例としては、「教員になるとすると、自分が児童の成長に少なからず影響を与えることを考えると、不安を感じる」、「子供たちの将来を支えられること→魅力。忙しい、夏休み少ない→魅力と感しない点」、「魅力…話を聞いてくれる、困った時に助けてくれる。魅力と感しない点…大変そう、人間関係が難しそう。懸念…給料が低そう、忙しそう」、「人と話すのが苦手。人の面倒を見られるだけの心の余裕を持ってない…」、「得意じゃない部活の顧問になりたくない。人気の先生とそうじゃない先生の差が辛い」、「行事とかがあって楽しそう。サービス残業が多いと言っていた」、「忙しそう」、「勉強だけでなく、自分の性格まで教育に影響を与えてしまう気がして、不安です。教えること、考えさせることは魅力的だと思います」、「生徒とのコミュニケーション難しそう」、「保守的で、柔軟に対応できる人が少ないような気がする。表面しか組み取れない人がいる」、「子どもとずっと接することができて楽しそう」、「自分の好きな学びを生徒に教えられるところが魅力的。生徒の保護者とのコミュニケーションが大変そう」、「すごくあがり症で人前で話すとき、すぐかおが赤くなり、どもってしまうので教員は向いてないなあ…って思います」、「たくさんの生徒と話す機会があるのは魅力だと思います。他人に自分が教えようとしていること・方法が上手く伝わらないことがこわいです」、「魅力と感しない点：日々ストレスがたまりそう。いつも悩み事が

ありそう。人と接する事に疲れそう」などであった。

以上のように、高校生は、魅力ある教員との出会いや教員による支援の経験等、人との関わりや教えることの楽しさ、職業体験や自身の経験・環境等、教科・学習内容等の興味・楽しさなどをきっかけに教員を目指すようになったとしていたが、特に魅力的または支援的な教員との出会いがもっとも多く挙げられた。ここから、魅力的、支援的な教員の養成、教員が魅力を発揮できるような職場環境の整備が重要であると考えられた。また、教員志望度別に教員の魅力、魅力と感じない点や、教員になることに対する懸念をみると教員志望が高いものほど、教員に魅力を強く感じ、懸念を感じてにくい状況が確認された。しかし、教員の仕事がブラック（多忙、給料が安い）、保護者との対応が難しいなどのイメージが高校生には共通に認識されていると考えられた。このような観点から教職を目指す高校生を増加させるためには、教員が楽しく、生き生きと活動できるような職場環境の整備が急務であると考えられる。

## 教員養成系大学の学生が教員にならない要因

物部博文、鈴木俊彰、鈴木雅之、梅澤秋久、泉 真由子、有元典文

### 1. 調査の背景と目的

横浜国立大学教育人間科学部（教育学部）入学者のうち最終的な教員採用率は、40～50%の間（約110名弱）で推移しており、定員230名のうちの120名以上が一般企業や公務員として就職している。毎年1月に実施している進路希望調査における教職志望は、入学時（4月）で80%以上、1年終了時（1月）でも70%以上の教員志望を示している。しかし、この数値が、2年生終了時で約60%、3年生終了時では50%後半にまで低下する。

このような課題に対して教員にならなかった卒業生のヒアリング調査に基づくデータを分析し、教員養成課程の学生を教職から遠ざける要因について明らかにすることを目的とした。

### 2. 調査方法

#### 1) 調査対象

横浜国立大学教育人間科学部・教育学の卒業生のうち、教職に就かず、なおかつヒアリング調査に協力の得られた53名を対象とした。

#### 2) 調査日時

2018年2月～2020年3月

#### 3) 調査内容

調査内容は、就職先、一般就職を選んだきっかけと時期、大学生活が進路決定に及ぼした影響、教員という職業に感じること、その他について回答を求めた。

#### 4) 分析方法

分析は、KHコーダーを用いて共起ネットワーク分析を実施した。

### 3. 結果と考察

一般就職を選んだきっかけと教員という職業に感じることについての共起ネットワークを図1に示した。

図中の「教員」、「教育」、「職業」、「魅力」、「思う」の構成要素に関連する内容としては、「教員という職業について、子どもの未来に関わる素晴らしい職業だと思っていました」、「教員という職業は、とても魅力的に感じている。大変ではあるが、それだけ達成感、やりがいを感じることでできる職業であると思う」、「児童生徒に多大な影響を与えるためにやりがいのある魅力的な職業であると思います」などのように教員の魅力ややりがいについて述べるコメントが多く認められた。

しかし、「小学校」、「中学校」、「高校」、「附属」の「実習」を介して、「教師」、「世界」を

「自身」が「知る」ほど、「一般」、「企業」、「就職」、「選ぶ」に繋がっていると考えられた。これに関連する具体的な記述としては、「入学時は教員になるつもりが多かった。・・・中略・・・教員は必要だと思う。ただしブラックだなと思う」、「3年次の教育実習が主たるきっかけ。教員の仕事に従事することについてやや自信を失った」、「子供が好きとはいえ、先生方の職責をつぶさにみて、とても自分に責任を担いきれる仕事ではないと思った」、「教育実習の後、学校の多忙さや教科中心の指導の現実を目の当たりにして悩み始めた」、「先生の働き方を見たり、話を聞いてみると、ワークライフバランスの面で自分には合わないと感じた」、「入学後、大学3年時、教育実習を経験した後ごろから少しずつ一般就職を希望するようになった。最終的には、ライフワークバランスを考え、一般就職することを選んだ」など教育実習を契機として、一般企業への進路の切り替えをしていると考えられる。

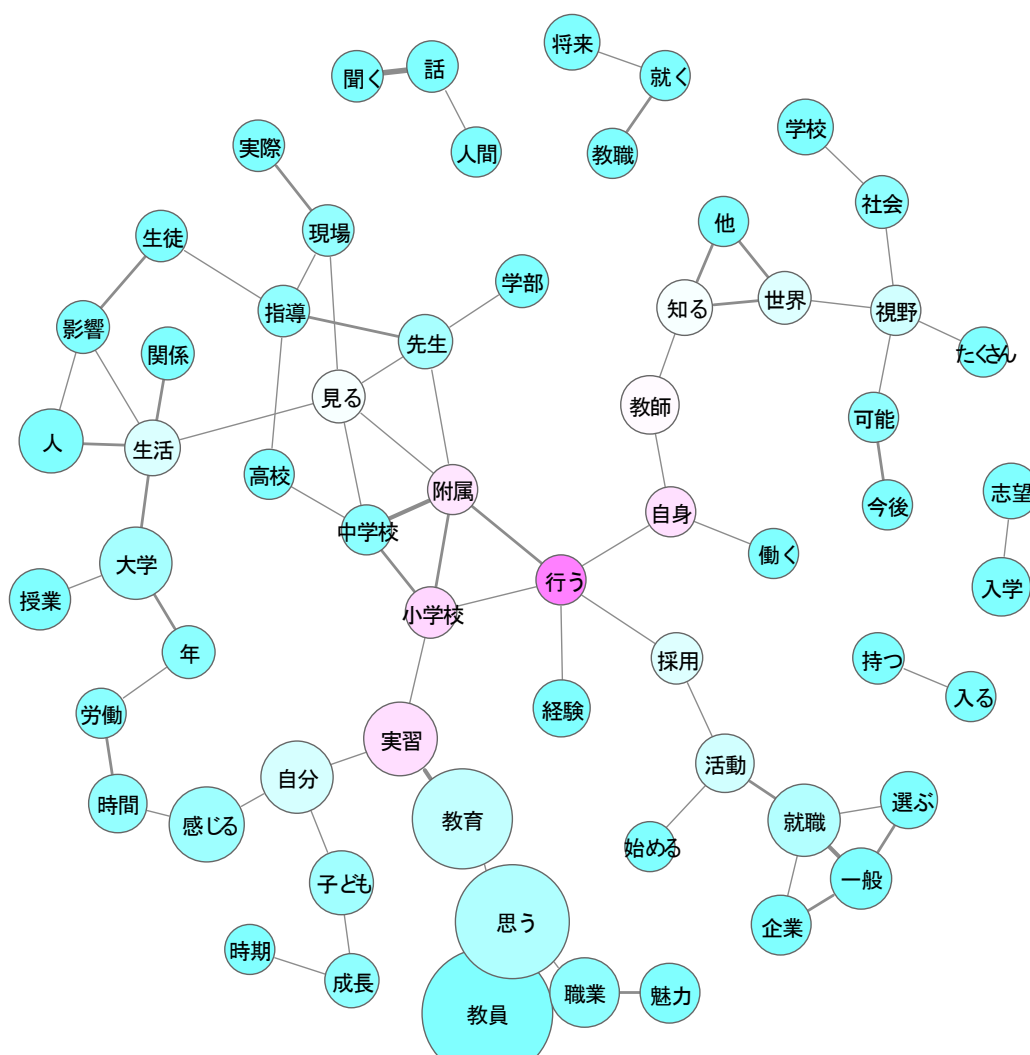


図1 一般就職のきっかけと教員に感じることの共起ネットワーク

これに関連して、図の左半面の「労働」、「時間」、「生活」、「人」、「影響」、「実際」、「現場」

など教員の職務の重さ、過酷さを表す語が抽出されている。「やりがいだけでは、将来が不安。家庭を大切にしたいので、子供の入学式や卒業式、運動会や学芸会には、必ず参観したい。しかし、教員の道を選べば、同じ日の勤務校の行事を優先しなければならないこともある。教員の給与では何人か子供ができた場合、私立大学には行かせられないし、留学に行きたいと子供がいても、応えられない。子供には教育ローンを負わせたくない」、「仕事のやりがいや大変さが同じなら、それなりの給与や福利厚生や手当がでる企業に入って、経済的にゆとりのある家庭を持ちたい。経済面だけでなく、教員の仕事は大変なのに、公の評価が低すぎる」、「教員という職業に対して、教育という重い仕事を、今の自分が行うのは難しいと感じている」、「教員という職業に対して、自分の持てる時間をすべて費やす職業と感じた」、「教員という職業に対して、責任とやりがいのある職業だと思う。ただ就労実態・待遇面等を考えれば、初めから熱さを持っていなければ入っていけないと実感した」、「現場の人に聞くと、時給換算をしたら 700 円だったなどのお話をよく聞きます。お金が全てとは言いませんが、いくら子供のためといっても最低賃金を下回ってしまうのはどうかと思います」などのコメントが示された。

その一方で、「将来」、「教職」、「就く」のように将来的に教職に就く可能性も伺い知れた。「今後、社会人を経て教員に戻ることはあるかもしれない」、「将来的に教員になるという選択肢も考えている。その場合に、逆に、企業に勤めた経験を生かせると思う」、「将来的に、教員もしくは教員に近い立場になりたいと考えている」などの具体例が示された。

以上のように教職につかない教員養成系の大学生の多くは、教員としての仕事は重要でやりがいはあるものの、教育実習をきっかけとして、自身の職業としては、負担が大きく、その負担の割には、給料や評価が低いという認識であると理解できた。しかし、これらの結果は、あまりにも理路整然としすぎており、教員養成系学部に入學しながらも教員にならなかった自身を肯定するための言い訳とも理解できる。引き続き、迷いなく教員を目指し、実際に教員として着任するような人材とはどのような人材かについて検討したい。

### 3. 高大接続インターンシップ

## コロナ禍におけるインターンシップ活動の困難さと可能性

横浜国立大学教育学部 物部博文

2020年は、全世界的な新型コロナウイルス感染症によるパンデミックに見舞われた。学校現場においても2月27日に学校の臨時休業の指示が突然に通達されるとともに、4月に発出された緊急事態宣言は当初の7都府県から全国に対象が拡大された。小学校、中学校、高等学校では、5月25日に全ての地域で非常事態宣言が解除されたのを受け、分散や時差登校を経て、6月中旬より学校が再開された。しかし、再開された学校では、休校期間中の学習の遅れを取り戻すための過密なカリキュラムが実施され、学校行事の多くはクラスター発生の抑制という名目で中止されていった。横浜国立大学においても、学生の時間的、距離的な行動範囲の広さによる感染拡大が懸念されたためすべての授業は遠隔により実施され、学生による実際の学校現場の授業参観や授業実践は困難となった。教員養成における要となる教育実習についても、当初、5月～6月実施であった予定が秋以降での実施へと変更された。そのような状況下で、本来であれば8月に実施する予定であった高校生インターンシップも中止となった。

しかし、このような状況のなかでも神奈川県教育総合センターの英断により、神奈川県内の教職に関心のある高校生を対象とした「高校生のための教職セミナー」が新型コロナウイルス感染症対策を実施しながら対面開講する運びとなった。また、秋に向かい流行が収束するタイミングで神奈川県立光陵高等学校、同多摩高等学校への出張オープンキャンパスが実施されるに至った。各大学のオープンキャンパスや説明会が次々と中止され、高校生のキャリア形成に向けた諸活動が実施困難な中で、高等学校教員の熱意により実施されたイベントであったと思う。

一方で、遠隔会議や遠隔授業に関わるインフラ整備やノウハウの蓄積が急激に進むというメリットも感じた一年であった。遠隔会議ツールにより距離と時間を一気に短縮できるようになった。例えば、本報告書有元典文の論考は、大学教員有志によるオンライン検討を経て、共同で熟成されていった。また、教員採用試験合格者による動画視聴と省察では、新型コロナウイルス再拡大時には、遠隔実施への切り替えがスムーズに行えた。

最後に、教育現場や教育委員会を訪問する際に、優秀な教員の養成を求められる機会が増えてきている。新型コロナウイルス感染症に限らず、困難な状況だからこそ、仲間と協働的に状況を変えていける教員、現状を変えていこうという熱量をもつ教員が求められているのかもしれない。特に、コロナ禍のなかで、「それでもなお前に進もう」とするのか、「そこで立ち止まる」の濃淡が明確になった1年であったともいえる。本報告書全般が、「それでも前に進もう」とする試みであるが、3章と4章の内容は、特にその要素が強い内容である。

## 神奈川県立総合教育センター主催 令和2年度「高校生のための教職セミナー」の概要

担当 横浜国立大学教育学部 梅澤秋久

日時：令和2年8月30日（日）午前9：00～

会場：神奈川県立総合教育センター大講堂

※従来、中講堂にて8月26日（水）と8月30日（日）の2回が計画されていたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため8月30日の回に集約され、会場が中講堂から大講堂へと変更された。

対象：神奈川県内の教職に関心のある高校生

### 神奈川県立総合教育センターから横浜国立大学教育学部への依頼内容の概要

「高校生のための教職セミナー」は、県内の高校生が大学での教職課程の授業を体験することで教職課程への理解や教育への情熱を高めることを目的としている。模擬授業等、教育に携わる魅力ややりがい、期待する教育者像を伝え、教育に携わることへの意欲の向上を促すような講義をお願いしたいとのことであった。

講義：「勉強から「きょうどう」的な学びあいへ」（教育学部教授 梅澤秋久）約60分

#### 講義概要：

約150名の参加者の中には聾学校の生徒もあり、事前の資料配付を実施した。他方で、既存の知識の伝達は現代的な教育方法ではないため手話通訳者にもご参加いただき、さらに透明なマウスシールドによって口話による理解の促進にも努めた。

#### 【「勉強」に対するマインドチェンジ】

冒頭で、「勉強」の固定概念の転換のワークを行った。

まず「勉強が好きか」という質問に挙手をしてもらった。若干の生徒が小さく手を挙げているが、概ね好きではない様子が見てとれた。

その後の活動は、配付されたプリント「第四期 国定修身教科書（昭和十一年十月十三日修正印刷巻一）『尋常小學校修身書 巻一 児童用』の一部抜粋」（図1）内から「勉強（ベンキャウ）」のページを探そうという内容である（課題1）。なお、修身科は、現在の特別の教科である道徳に近い教科であることを踏まえ、小学校1年生に絵や短文で何を教えようとしているのか、すべての（ ）内にタイトルを考え記載するよう求めた（課題2）。大講堂ではあったが、活動中は通路内を巡視した。コロナ禍、身体的距離の確保が叫ばれる中、





「勉強（ベンキヤウ）」の説明をしている絵（教科書のページ）はどれでしょうか？

図 1 (1)ベンキヤウを探そう (2)小1 児童に何を教えているページがタイトルを書こう

対話が制限された個別の冷たい雰囲気を感じたため「隣と笑顔の目で見せ合ったり、マスクから飛沫が漏れないレベルの対話をしたりしてみてください」と伝えた。すると、会場内の雰囲気が少し和らぎ、あるペアからは「どれも勉強っぽいよなあ」というつぶやきが聞こえてきた。

多くの生徒は、上段の一番右側を「勉強」と解答していたが、不正解である。右上段と右下段がセットとなり「ヨクマナビ、ヨクアソベ（よく学び、よく遊べ）」という内容になる。スクリーンへの投射で順に答え合わせをしていくが、「唯一無二の正解の記憶」がいま求められる学びではないため、センスのある解答は「最適解」とした。

上段の右から 2 番目は「センセイ（先生）」が教科書上の正解であるが、「あいさつ」や「礼儀」などの記載が認められたため、それらも最適解であると伝えた。

上段右から 3 番目は「子どもが大勢集まっています。目の見えない子どももいます。手を引いてあげたり、物を取ってあげたりして、みんな一緒に、楽しく遊んでいます。」という文があるが、正解は「思いやり」である。参加者の最適解には「優しさ」が多く、「インクルーシブ」という参加生徒の現代的な表現もあった。

上段左端は「親の愛」であり、その下（左下）は「親のいっつけは守れ」という、表裏一体の内容であった。「〇〇しなさい」という道徳的価値を教えるのが修身科の特徴であることから、戦後、修身が道徳に変わり、現在、特別の教科道徳へと推移した経緯は、大学に入

大雪が降りました。友達は学校へ行く途中から引き返しました。小川さんは一人で行きました。



「ベンキヤウ」は、このページ

学してから深く探究してほしい旨を伝えた。

下段の右から 2 番目は「竹子のお母さんは、病気で起きられません。近所の人に来て、学校へ持っていくお弁当をこしらえてあげました」であり、「近所の人」が正解である。核家族化が進み、地域社会の疎遠が進む中、学校運営協議会等、地域と学校教育の新しい協働方法が生み出されていることを紹介した。

図 2 ベンキヤウ（勉強）のページ

さて、「ベンキヤウ」は図 2 の通りである。

約 150 名のなかで、このページを勉強だと答えた生徒は皆無であった。

勉強は、中国から伝わった熟語であり、語源は「無理をすること」、「もともと無理があること」である。

「冒頭で勉強好きでないと解答した皆さんは『無理をさせられている』と感じているのかもしれない」と伝えると、講堂の最前列、後方に座っている先生や指導主事と思われる方々の苦笑いが見てとれた。

### 【「学び」とは？ これからの教育の在り方】

他方で、学びとは何かを考えるため、「学」の旧字体を書いてみるワークを行った。先ほどと同じく隣と書いた文字を見せ合うことを推奨した。正解は「學」であるが、これをアウトプットすることは目的ではなく、旧字体の「學」の部首の意味を考えてもらう点を重視した。



図 3 「學」の部首の意味

「子」は「子ども」を、「わかんむり」は「建物」を表す。「メメ」は交わりを表すが、上の「メ」は「高尚なもの（＝先人が創り上げた文化）との交わり」を、下の「メ」は「仲間との交わり（関わり）」を示す。上部の両側にある「白」は「両手で物を持ちあげる」という意味があり「大人の絶対的な支援」を表すと考えられる。

つまり、これからの教育は「無理（勤勉さ）を強いる」勉強から、仲間や先生とのかかわり合いの中で学習者が自ら既存の知識や技能（文化）を活用し、新たな「知」を協働創造する「学び」への再構築が求められている点を確認した。

### 【創造社会における学習デザイン：プロジェクト学習】

Society5.0 は創造社会である。出来合いの答えを一律一斉に全員が同じペースで獲得していく教育方法は Society3.0 の工業型社会のベルトコンベア方式である点を伝え、知識をイ

ンプットして正解を算出する仕事は、今後AIや機械に代替されていくことを確認した。一方、多様な他者へのケアリングや最適解（合意解）を協働創造／創発する仕事は、今後も必要不可欠であるため、そのような資質・能力を育成する教育方法が希求されている点を強調した。

ここで講義担当の梅澤が小学校教員時代に実践した「器械運動の集団演技創造のプロジェクト学習」の動画を視聴してもらうこととした。とかく器械運動は、画一的な技の獲得を目標にされた歴史を有している。「目標—達成—評価」型のカリキュラムでは、変化の激しい未知の状況に対応できる思考力・判断力・表現力の育成には繋がりにくい。そのため、「主題—探究—表現」型のカリキュラムへのパラダイムチェンジが求められている点を伝えてから動画を流した。

主題は、テーマやプロジェクトといった唯一無二の正解が存在しない点が特徴的であり、最適解（合意解）の協働創造／創発のプロセスが重視される。また、そのプロセスにおいて、多様な他者を受容し合う(1)「人間性」を基盤として、集団のパフォーマンスを高め合うために(2)「思考力・判断力・表現力」をフル稼働する。当然ながら（この学び合いでは器械運動の）(3)「知識・技能」も協働的に習得するが、そのプロセスにおいても自己調整的で且つ粘り強く学ぶ必然が埋め込まれているため、(4)「主体的に学習に取り組む態度（学びに向かう力）」の発揮も求められる。これら(1)～(4)は、現代的な資質・能力と称されており、プロジェクト型の学習は、その育成に資する教育方法だといえるのである。

以上のような新しい教育方法の意味と意義について説明した後、動画内の該当児童（すでに成人）らとの同窓会やその後の成長の様子を画像を投影し、教職は「いまと未来をつくる仕事」である点を強調して紹介した。

### 【協働創発型の学びあいの体験】

高校生として、R4年度から全面実施となる新学習指導要領の新教科である「日本史探究」におけるジグソー学習を実際に体験してもらった。

本セミナーでは「歴史は記憶の教科」というマインドセットを崩すことを目的とした「もしあなたが戦国大名なら、どこに城を築くか」（図4）を協働創造する学びあいである。

当然ながら根拠に基づいて最適解を創発する必要がある。そ

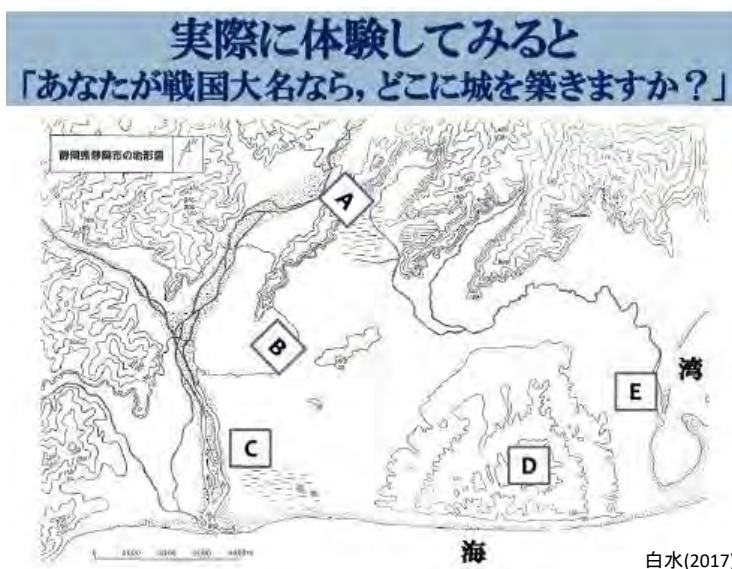


図4 あなたが戦国大名ならどこに城を築くか

のため、3人組のグループには、「い」の山城、「ろ」の政治、「は」の商業のそれぞれエキスパート担当を決めてもらった。

本来ならば、同じエキスパート内容のメンバーが集合して深く学び合うが、時間の都合と移動の制限等があったため割愛した。

よって、各グループ内の「山城」「政治」「商業」担当がプリントに記載されている内容に基づいて学び、その後、それぞれが学んだ内容で意見をぶつけ合い、自グループの最適解を協働創発するという具合となった。

歴史は塗り替えられないが、本ジグソー学習は、軍事、政治、経済を同時によりよく回すための、未知への探究的な学び合いである。カリキュラムデザインによっては教師が準備した資料以外を学習者が調べ、準備することも可能である。より明確な根拠を基盤として自身のグループのプレゼンテーション（表現）をパフォーマンスすることは、社会に出てからむしろ必要な能力となる。すなわち、探究的な学びあいには、現代的な資質・能力を発揮する必然がふんだんに盛り込まれているのである。

なお、社会に開かれたカリキュラムとは、実社会に生きて働く資質・能力の育成に繋がる説明責任のプロセスである。これからの教員には、そのような説明責任に資するカリキュラム・マネジメントも求められている点も紹介した。

### 【まとめ】

教職の難しさは、自身が受けた教育経験を「生活概念」として再生産しがちな点である。

他方で、社会の変遷に応じて、求められるチカラ（資質・能力）や教育方法はアップデートし続ける必要がある。そのアップデートにワクワクしつつ、学習者の主体的・対話的で深い学びの伴走者（＝学びの協働探究者）になれる人が、いま求められる教育職員である点を伝え、本セミナーのまとめとした。



（い）の担当者は、山城について深く学ぶ。山城のエキスパートグループで探究してから、自身のグループ（クラス）に戻る。

図 5 山城（軍事）のエキスパート資料



（ろ）の担当者は、政治について深く学ぶ。政治のエキスパートグループで探究してから、自身のグループ（クラス）に戻る。

図 6 政治のエキスパート資料



（は）の担当者は、商業について深く学ぶ。商業のエキスパートグループで探究してから、自身のグループ（クラス）に戻る。

図 7 商業（経済）のエキスパート資料

## 神奈川県立多摩高等学校主催 令和2年度「大学出張講義」の概要

担当 横浜国立大学教育学部 物部博文、泉真由子

日時：令和2年11月10日（火）午後12：50～

会場：神奈川県立多摩高等学校 2学年教室

対象：神奈川県立多摩高等学校 2年生

### 神奈川県立多摩高等学校からの依頼内容の概要

「大学出張講座」は、自分の興味関心に沿って、上級学校ではどのようなことに取り組むことができるのかを考える機会とすることを目的としている。キャリアガイダンスグループの担当教員からは「コロナ禍の影響もあり多くの大学でオープンキャンパスや説明会が中止、あるいはオンラインでの開催となっております。このような状況で高校2年の生徒たちは、まだ具体的な上級学校のイメージを描くことができておりません。生徒たちに大学での学びがどのようなものであるかを具体的にイメージさせることを目的にこの行事を企画しております。本校では横浜国立大学を志望する生徒は多く、大学の説明も含めてぜひ講師を依頼したいと思っております」との依頼文が添えられてあった。また、この大学出張講義に至った経緯としては、教職大学院の学校実習校として多摩高校と連携協力を結ぶことになり、その連携の一貫として依頼を受けた形になる。

講義：模擬授業：「ストレスと心の健康」約50分、学部説明：「横浜国立大学教育学部での学び」約10分（担当 物部博文）

### 講義概要：

64名（32名×2回）の参加者に対して、コロナ禍で高校生自身もストレスを感じていると思われる状況、比較的生徒に親しみやすい内容という観点から模擬授業「ストレスとこころの健康」を約50分間、講義・演習形式で実施し、最後の約10分を「横浜国立大学教育学部での学び」として学部での学びについて説明し、質疑応答を行った。

#### 【ストレスに関するミニレクチャー】

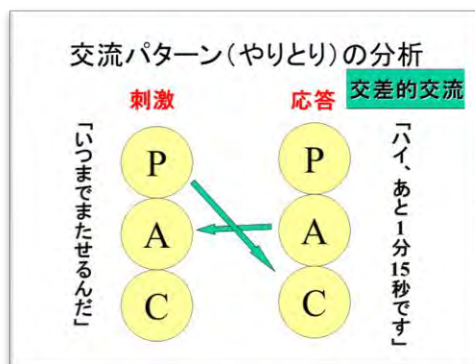
冒頭では、ストレスの概念、ストレスと健康の関り、児童生徒の学校ストレスとストレス反応について簡単なミニレクチャーを実施した。

#### 【高校生自身のストレスチェック】

次いで、ストレス評価指標を用いて、高校生が自身のストレスについてチェックした。

### 【エゴグラムを用いた自己分析、交流パターン、ストロークの演習】

エゴグラム（中高生版）を用いて、自我状態の反応、高校生自身のエゴグラムのパターンを分析および内省した。高校生は、自身のエゴグラムのパターンを自然に友達と見せ合い、時折、笑いながら相互評価を始めた。その後、交流パターン（やりとり）の分析と演習を全体で行った。さらに、「相手にポジティブなストロークを送ろう」という演習では、ペアになり、ディスタンスを保ちながら相手の目を5秒間見つめあってもらい、5秒後に最高の笑顔を見せるように指示した。次いで、相手のよいところを3つ言いあい、言い終わったら肘タッチ（普段は握手するが、コロナ対策のため肘タッチに変更）をするという演習を実施した。講義・演習全体を通してこの演習への反応がもっともよかった。教育学部も視野にしている生徒らしく、友達との交流や会話を積極的に楽しめる生徒が参加している印象であった。児童・生徒のみならず同僚教員や保護者と積極的に関ることができるのは、教員としての重要な資質・能力であると考えられる。



ストロークを体感しよう!

・私に目線をください!  
(ポジティブ?  
ネガティブ?  
ストローク)

- 臨席の人と目線を合わせてください!(5秒間)
- そして最高の笑顔
- 肘タッチしてみませんか?

### 【横浜国立大学での学び】

最後の10分は横浜国立大学での学びとして、スライドを用いながら、教育学部の学びが理論と実践の往還であること、コース・専門領域と免許、多様な学び（大学での授業、教育現場での授業）と具体例（教職入門、基礎演習、領域での学び、卒業研究、スクールデー実践B、教育実習、学外での発表）の後、組織改編の概要について説明した。



### まとめ

今回参加者した高校生全員が、教員を目指しているという印象ではなかったが、高校生への出張講義が、将来の職業選択のひとつとしての教員に興味をもってもらえる機会になる可能性は確認できたと考える。

## 神奈川県立光陵光陵高等学校主催 令和2年度「出張オープンキャンパス」の概要

担当 横浜国立大学教育学部 物部博文、梅澤秋久、鈴木俊彰、泉真由子

日時：令和2年10月1日（木） 15：20～16：50

会場：神奈川県立光陵高等学校 視聴覚室

対象：横浜国立大学教育学部進学志望の生徒および本講座への参加を希望した教職員

### 神奈川県立光陵高等学校から横浜国立大学教育学部への依頼内容の概要

「出張オープンキャンパス」は、横浜国立大学教育学部の教授による教育学部に関するガイダンスを通して、横浜国立大学教育学部の特色や教育内容、及び入学者選抜方法に関する理解を深めることを目的として実施した。

横浜国立大学と光陵高等学校との連携は、附属横浜中学校と光陵高等学校への進学、アイ・ハーベスト発表会、教育実習など様々な形で実績を重ねてきた。特に光陵高校で教育実習を経験した学部学生は、ほぼ100%が教員として採用されている。近年、光陵高等学校は、教員養成をひとつの目標として掲げており、横浜国立大学教育学部とのさらなる連携を望むなかでの、本出張オープンキャンパスの依頼となった。

説明会・質疑応答：「横浜国立大学教育学部の特色及び教育内容の概要紹介、令和3年度（及び令和4年度以降）の入学者選抜方法に関する概要」 約90分

### 講義概要：

54名の参加者があり2年生のみならず多くの3年生の参加がみられた。事前アンケートを実施したところ、横浜国立大学教育学部の教育内容、教員としての資質、大学入学者選抜、教育における課題・問題について分類されたので、質問に応じるようにスライドを構成した。前半は、横浜国立大学教育学部での学び（説明担当：物部博文）、横浜国立大学教育学部学校教育養成課程入試説明（説明担当：鈴木俊彰）を実施し、後半は、当日参加していた元横浜市教育委員会の本学部教員、光陵高等学校教員を巻き込みながら生徒と参加した本学教員での対話形式で進行した。その後、生徒に対する個別相談を実施した。

### 【前半：横浜国立大学教育学部での学び】

冒頭で横浜国立大学教育学部での教職カリキュラムが理論と実践の往還で構成された学びであることを説明した。すると、生徒から「自分は心理学科を考えていて、自分の知りたいことを自分なりに研究することができるところが特色だと伺ったのですが、授業が基本

的にそれぞれの研究なのか、机にみんなで座って受ける授業もあるのか、教えて頂きたいです」という質問が出た。大学では、机にすわって受ける授業もあるがワークやディスカッションを中心に進める授業もあり、自分の知りたいことを研究するのは特に卒業論文への取り組みがあると回答した。そして、そのために様々なコース・領域があり、教員免許もさまざまな免許が取得できる状況を補足説明した。

生徒からの「横浜国立大学教育学部では、ICT を活用した教育についてどのような授業が行われていますか。また、附属学校では数年前から ICT を活用した授業が行われていることですが、ICT を活用することによる利点についてお聞かせいただけませんか」という質問に対して、教科教育法の授業では ICT を活用した授業方法についても取り組むようになってきていること、令和2年度はコロナ禍の状況下で大学でも遠隔授業を実施しており、ICT を用いた新しい授業の形態が経験できている状況やそのなかで距離を超えて参加できるメリット（九州の実家にいながら横浜の授業に参加できる）なども説明した。また、「現在の知識を埋め込む『詰め込み型教育』がそもそも悪政のような気がします。機械に代わるために教育受けていると言っても過言ではないと思うのですが、どうお考えでしょうか」という質問に対しては、詰め込める知識はスマホで簡単に調べられる時代になっており、正解が存在する仕事は機械や AI にとってかわられるので、今の大学では知識詰め込み型の授業については想定せず、その知識をどう活用するか、あるいは協働的に知識を創る教育のあり方が問われていると説明した。また、「児童にやる気を出させる方法を教えていただけませんか」、「児童に強制はせずに勉強を好きになってもらう方法についてご意見を伺いたいです」という質問をとり上げ、非常にセンスのある質問だと評し、学習者の動機を高めるといのは教職の永久の課題であり、よい方法があったら我々大学教員にも教えてほしいと返答した。質問にあったようなテーマは、みなさんが教育学部に入学してからも是非考え続けてほしいと生徒へのメッセージを投げかけた。

続けて、大学での学びの例として1年時の教職入門の1シーン（教員はブラック vs. ホワイト）をとり上げ、230人で実施する授業もあるものの、230人が対象でもアクティブ・ラーニングの授業展開が可能であると話をした。これに関連する生徒の質問項目「近年の教育学部志願者の減少、および教員採用試験受験者の減少について、ご意見をお聞かせください」、「近年、教員のブラック度が問題視されており、私は「公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法」が原因の1つであるとも考えております。この件について、先生方はどのようにお考えでしょうか」に対して、偶然その場に居合わせた元横浜市教育委員会の本学部教員



図1 大学での学びの様子



(教員の働き方改革を担当)が、教職員の働き方改革について説明し、職場が変わりつつある状況を取り上げて説明した。続けて、20名規模で実施する基礎演習(クラスとしての機能)、保健体育専門領域の健康教育、中等保健体育科教育法、臨海実習について解説を加えた後、スライド(図1)で何か気づかないかという質問を生徒に投げかけた。スライドの中には、光陵高校に在職中の保健体育科教員の学生時代の姿が映し出されており、彼の存在に生徒が気づいたのを機にマイクを当該教員へと渡した。

民間企業を経験した後に高校教員となった彼に、「なぜ民間企業にいったん就職したのか」、「民間と比較しての教職の魅力は」という質問を投げかけてみた。その質問に対する彼の回答は、「高校教員を目指した際、生徒の就職支援をするときに民間経験が必要だと思ったから」、「民間と比べると仕事に対する自由選択の範囲が大きく、やりがいがある」という回答であった。彼とのやり取りの後、話をもとに戻して、卒業研究について説明した。

大学における教育現場での学びとして、SV(退職校長)と大学教員の指導のもとで拠点校(横浜市小学校)において日常的な教育実習を実施するプログラム「スクルーデーB」や教育実習についての説明をしていった。さらに大学外での交流や発表の場(例としては、教育大学協会、CSTシンポジウムを提示)についても説明をした。

最後に、2021年度から教育学部学校教育課程から学校教員養成課程へ名称変更し、より教員養成の特色を鮮明にするとともに、定員200名の50%近くまで総合型選抜や学校推薦型選抜で入学させるように変更することを説明して後半に引き継いだ。

### 【後半：横浜国立大学教育学部学校教育養成課程入試説明】

後半は、教育学部の組織改編について、スライドを用いて説明をした。図2に示す通り、230名の定員が200名になり、コースの改編が行われる点に加え、大学院の組織改編についても紹介した。

また、「教育学部は、学校教育に関心が高く、教員として子供の学びへの支援の方法を、能動的かつ協働的に創造していこうとする強い熱意を有する人を求めています」というアドミッションポリシーを紹介し、求める学生像として以下の3点について言及した。

- 子供とコミュニケーションをとりながら共に学び続けたい人

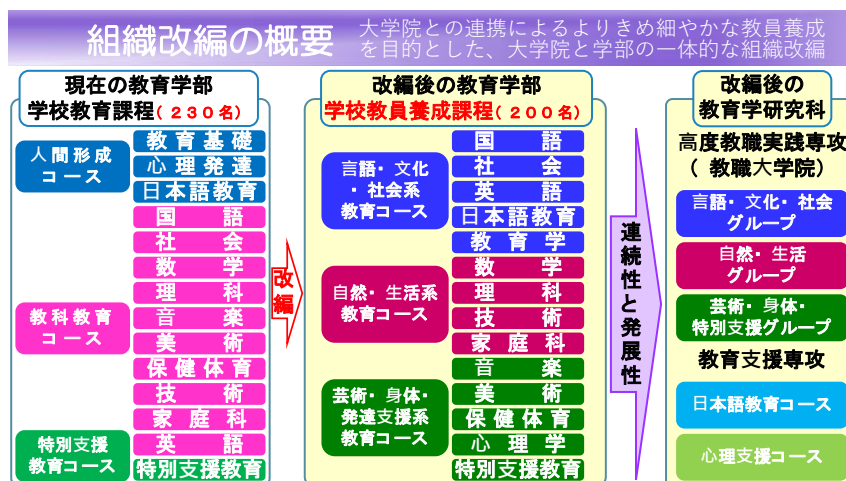


図2 教育学部の組織改編の概要

- 学校教育・特別支援教育の充実、創造に貢献したい人
- 現代的な教育課題に対して、他者と協働して広い視野に立った解決策を構想し実践したい人

すなわち、学校教員養成課程への改編は、教員になりたい学生を切望しており、学校現場での実習系科目が充実している等、教員になりたい学生にとっては実践的先進的な楽しいカリキュラムである点を説明したのである。

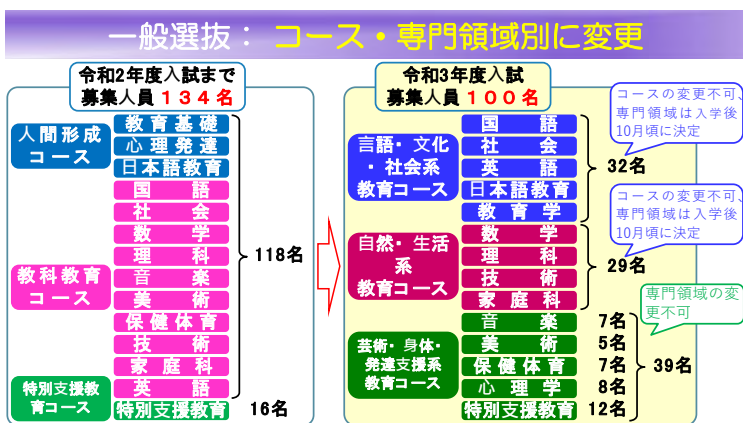


図3 一般選抜の変更点

続けて、入学者選抜の変革について紹介した。大学院との連携によるよりきめ細やかな教員養成を目的とした大学院と学部の一體的な組織改編に伴う入試改革であることから、一般選抜におけるコース・領域別入試を実施する旨を紹介した(図3)。

言語・文化・社会系教育コース(一般選抜定員32名)は、1年次の10月(秋学期開始前)に国語、社会、英語、日本語教育、教育学の5専門領域に配属がなされる。また、自然・生活系教育コース(一般選抜定員29名)も、同時期に数学・理科・技術・家庭の4専門領域に配属決定がなされる点を紹介した。他方で、音楽・美術・保健体育・心理学・特別支援教育については、一般選抜段階から専門領域が決定されている点が大きな変更であると説明した。

言語・文化・社会系教育コース(一般選抜定員32名)は、

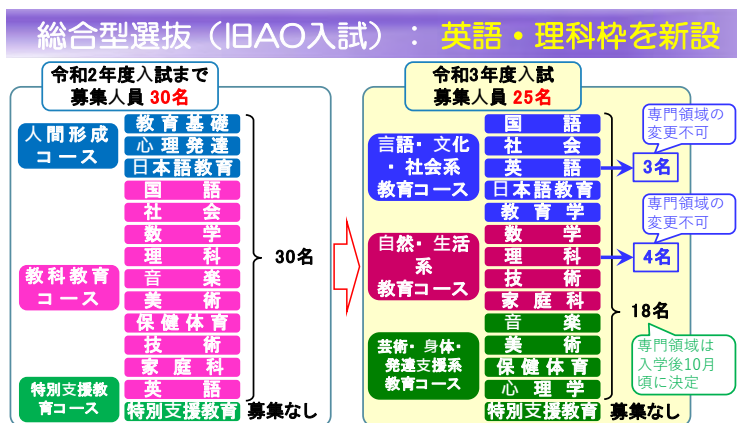


図4 総合型選抜の変更点

総合型選抜(旧AO入試)については、理科や英語の専門性を有する小学校教員のニーズが高いことから、英語で3名、理科で4名の枠を新設することとした(図4)。

専門領域のいずれかに配属がなされる旨を紹介した。

また、その他の募集人数が18名であり、その入学者らの専門領域は、1年次の10月(秋学期開始前)に14専門

学校推薦型選抜においても、学校現場のニーズに応じた定員増について説明した(図5)。具体的には、技術・家庭・美術の各専門領域を従来の4名から6名にし、且つ複数免許取得

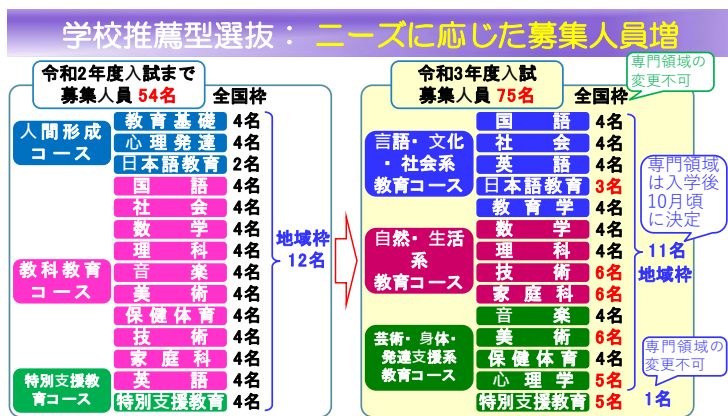


図 5 推薦型選抜の変更点

を推奨することで中学校現場の教員数が少ない教科の免許状を有する教員の輩出を目的としている。また、学校現場での個別支援を有する児童生徒の増加や心のケアへの対応の増加、外国にルーツのある児童生徒の増加傾向を鑑み、特別支援教育・心理学・日本語教育の学校推薦型選抜での入学者定

員をそれぞれ1名ずつ増やした点を紹介した。

以上の入学者選抜に関する改革を説明した後に、令和3年度入試におけるコロナ対応についての説明を行った。具体的には、総合型選抜と学校推薦型選抜が今年度に限り2週間程度後ろ倒しになった点、総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜の課題の変更について説明した。

以上の入試変革内容に加え、これまで光陵高校出身で本学教育学部に入学してきた学生の教員採用率の高さを紹介し、教職志望者の受験を切に願っている旨のお知らせをして入試説明を終えた。

【補足】

全体会后にアンケートへの記入をお願いした。さらに、その後個別の質問コーナーを設定したところ、4名の大学教員の前にそれぞれ行列ができるほど生徒たちの動機は高かった。参加した大学教員も本出張オープンキャンパスへの成果を感じた瞬間であった。

参考資料：光陵高校生徒からの事前質問 一覧

【横浜国立大学教育学部の教育内容について】

- ・自分は心理学科を考えていて、自分の知りたいことを自分なりに研究することができるところが特色だと伺ったのですが、授業が基本的にそれぞれの研究なのか、机にみんなで座って受ける授業もあるのか、教えて頂きたいです。
- ・横浜国立大学教育学部では、ICTを活用した教育についてどのような授業が行われていますか。また、附属学校では数年前からICTを活用した授業が行われているとのことですが、ICTを活用することによる利点についてお聞かせいただけないでしょうか。

【教員としての資質について】

- ・小学校教員に必要な力とは何でしょうか。
- ・勉強以外の力を育てるために必要な力や考え方とは何でしょうか

- ・ 教員になるために今のうちにやっておくべきことは何でしょうか。
- ・ これからの横浜市や神奈川県为学校教員に求められるものとは何でしょうか？
- ・ 児童にやる気を出させる方法を教えていただけないでしょうか。
- ・ 児童に強制はせずに勉強を好きになってもらう方法についてご意見を伺いたいです。

#### 【大学入学者選抜について】

- ・ 高校一年生からすべき大学受験の対策とは何でしょうか。

#### 【教育における課題・問題について】

- ・ 総合的な学習の時間ではどのような活動をする事が良いのでしょうか。(私の小学校では、クラスによってあまりにも活動の差が出ていたので先生にもなにか関係があるかと思ったので)
- ・ 近年の教育学部志願者の減少、および教員採用試験受験者の減少について、ご意見をお聞かせください。
- ・ 近年、教員のブラック度が問題視されており、私は「公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法」が原因の1つであるとも考えております。この件について、先生方はどのようにお考えでしょうか。
- ・ 中央教育審議会の人物構成になっているのかを調べたところ、教職員の声在学习指導要領に反映されにくいような役職の構成になっていると思われました。これを踏まえ、現在の学習指導要領の内容及び作成プロセスについてご意見をいただきたいです。
- ・ 様々な理由で学校に通えない子供たちが多くいます。現在、私は、どうかそういう子供たちに学校の授業だけでも提供して、復学をより身近にしたいと考えています。そこで、一つ的手段として授業映像を撮影し、映像授業を提供することを考えています。これについて、先生方のご意見をいただきたいです。
- ・ 私はどちらかというと「教育」学ではなく「教育学」を学びたいのですが、「教育学」を学ぶために学校における現状を深く知る必要があると考えています。横浜国立大学や東京学芸大学などのように教員養成をする「教育」学部と東京大学や京都大学などのように教育学を研究する「教育学」部を分けている理由を教えてください。
- ・ 現在の知識を埋め込む詰め込み型教育がそもそも悪政のような気がします。機械に代わるために教育受けていると言っても過言ではないと思うのですが、どうお考えでしょうか。
- ・ 現在、学校で教育している英語はリーディングが中心です。大学入試においてもリーディングが大きな点数を持っています。リーディングではなく、スピーキングやリスニングと言ったコミュニケーションを重視した教育制度にした方がいいのではないかと個人的には思いますが、先生方はどのようにお考えでしょうか。
- ・ 「なぜ学ばなければいけないのか」ということや、学ぶことの意義、これからの時代に即した学習体制なのかなどを、教員が考えていく必要があるように感じているのですが、この点について、ご意見を頂けないでしょうか。

## 神奈川県下における教育ニーズに対応した学部改編と課題

横浜国立大学教育学部 鈴木俊彰

### 免許外教科担任の解消と特別支援教育の充実

「免許外教科担任制度」は、当該教科の免許状を有しない教師に当該教科を担当させる制度であり、昭和 20 年代に免許状を有する教師が全国的に不足する中で導入されたが、現在は個別の事情により、やむをえず生ずる配置のニーズを適時に調整するために利用されている\*1。表 1 に神奈川県内の免許外教科担任の許可件数を示すが、毎年 300 件以上（全国では 10,000 件以上）の免許外教科担任が許可されている状況にある。また、中学校では「美術」、「技術」、「家庭」、高等学校では「情報」や「職業」に関する教科を中心に、特に小規模校でこの制度が利用されている（表 2）。主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の重要性が示される中、免許外教科担任は縮小されるべきである。

文部科学省では、「免許外教科担任」の解消を目的として、複数教科の免許状の取得を促進するため、免許状の取得要件の弾力化を対応策のひとつとして挙げている。また、大学には、複数免許状を取得しやすくすることや免許法認定講習の開設の協力などが期待され、教育委員会には、複数教科の免許状を有する者への採用選考等における配慮や、免許外教科担任の許可の基準等の見直し及びその運用の徹底が求められている。表 3 に複数教科免許状保有による教員採用試験(中学校教諭)における加点の実施状況を示す。

一方、インクルーシブ教育推進のためには、すべての教員が特別支援教育に関する一定の知識・技能を有していることが必要である\*5。特に、発達障害の可能性のある児童生徒の多くが通常学級に在籍していることから、発達障害に関する一定の知識・技能は必須である。また、特別支援教育により多様な子どものニーズに的確に応えていくためには、教員だけの対応

表 1. 免許外教科担任の許可件数(神奈川県)\*2

	H26	H27	H28
中学校	144	149	141
高等学校	205	173	180
計	349	322	321

表 2. 免許外教科担任の教科別許可件数(全国)\*3

	H26	H27	H28
家庭	2264	2189	2181
技術	2096	2114	2146
美術	992	944	938
数学	426	454	417
保健体育	410	409	397

表 3. 複数教科免許状保有による教員採用試験での加点の実施状況(中学校教諭)\*4

都道府県	受験教科に対する他教科(複数教科)免許状保有による加点
茨城県	複数教科の免許状を保有
新潟県	「音楽」、「美術」、「技術」、「家庭」受検者で他教科の免許状も保有
山形県	複数教科の免許状を保有
静岡県	複数教科の免許状を保有
三重県	複数教科の免許状を保有
奈良県	「音楽」、「美術」、「技術」、「家庭」を含む複数教科を保有
徳島県	「音楽」、「美術」、「保健体育」、「技術」、「家庭」を志願する者で、出願教科以外の免許状を保有
愛媛県	複数教科の免許状を保有
高知県	複数教科の免許状を保有
佐賀県	複数教科の免許状を保有
長崎県	複数教科の免許状を保有
鹿児島県	複数教科の免許状を保有
新潟市	「音楽」、「技術」又は「家庭」受検者で他教科の免許状も保有
浜松市	複数教科の免許状を保有

では限界がある。校長のリーダーシップの下、校内支援体制を確立し、学校全体で対応する必要があることは言うまでもないが、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、等の専門家の活用を図ることにより、障害のある子どもへの支援を充実させることが必要である。

神奈川県下自治体の各校長会長への教員ニーズに関するヒアリング結果（表4）からも分かるように、教育現場からは複数教科、特に「技術」、「家庭」の中学校教諭免許状を併せもつ教員、特別支援学校教諭免許状をもつ教員の養成が望まれている。

表4. 神奈川県下自治体の各校長会長への教員ニーズに関するヒアリング結果

ヒアリング対象	年月日	概要
A市 小学校長会長	2019.7.10	名前がつかない発達障害が増加している。特別支援コーディネーターが学校に来ても、その学年の中では広まっても学校中には広まらない。個々の教員のアセスメントの仕方があまいなど、特別支援に対する素地を持っていない教員が多いためである。だから2種でも特別支援教育の免許を持たせてほしい。
A市 中学校長会長	2019.7.12	技術・家庭の欠員が多い。しかし、「技術」・「家庭」は、12.5時間ずつでひとり採用するには至らない。「技術・家庭」の両方を持っている、あるいは「数学・技術」など複数の免許をもっていると現場で運用しやすい。2種でも免許を持っていれば採用できる。
B市 小学校長会長	2019.7.17	通常指導教室の児童数が急激に増加している。また、重複障害の児童も増加している。大学において指示・トラブル・表情など特別支援教育を学んできてほしい。
B市 中学校長会長	2019.7.23	技術、家庭は非常勤が多い。「数学・技術」、「理科・技術」など複数免許を持っていると運用しやすい。「家庭科」・「美術」は女性が多く、育休に入る方が増えている。
C市 小学校長会長	2019.7.20	人手が足りないし、初任者が特に難しい。学級担任制は限界があるので教科担任制を取り入れながら全員で児童を見るようにもっていききたい。
C市 中学校長会長	2019.8.26	大学からATなどで教育現場に通っている人よりも、さまざまな経験をたくさん持っている人のほうが視野が広い。社会をよく知ってから教員になってほしい。「技術」・「家庭」に関して複数の免許を取得しているほうが運用はしやすい。

※B市からは、「特別な支援を必要とする児童生徒への対応、外国につながる児童生徒の支援が大きな2つの教育課題である」という意見もある。また、A市立学校には外国籍などの子どもが2017年時点で9100人在籍しており、その支援ができるような教員が求められている。

### 令和3年度の教育学部の改編および教育カリキュラムの再編成

教育学部は、令和3年度4月に教育組織を改編し、課程名称を「学校教員養成課程」に変更する。神奈川県内唯一の国立大学教員養成系学部であり、地域の教員養成の中核的存在として従来以上に重要な役割を果たしていくため、県内各教育委員会等と連携した教員養成及び教員研修などを通じ、グローバルな視点から教育の未来を切り拓くことのできる人材を輩出するとともに、教職大学院とも連携し、教育組織・カリキュラムの再編成を行う。

#### (1) コースの再編

教職大学院が「学校マネジメントプログラム」と「教科教育・特別支援教育プログラム」に再編され、後者は「言語・文化・社会グループ」、「自然・生活グループ」、「芸術・身体・特別支援グループ」から成る。教育学部と教職大学院の教育に連続性と発展性をもつ教員養成を行うため、教育学部・学校教員養成課程を「言語・文化・社会系教育コース」、「自

然・生活系教育コース」、「芸術・身体・発達支援系教育コース」の3コースに再編した。

「言語・文化・社会系教育コース」は、国語、社会、英語、日本語、教育学の5専門領域、「自然・生活系教育コース」は数学、理科、技術、家庭科の4専門領域、「芸術・身体・発達支援系教育コース」は、音楽、美術、保健体育、心理学、特別支援教育の5専門領域の計14領域から成る。

(2) 複数教科の中学校教諭免許状をもつ教員、特別支援学校教諭免許状をもつ教員の養成

H27-30年度の副免許一括申請件数(合計)を表5に示す。人間形成コース(教育基礎・心理発達・日本語教育)では、必須の小学校教諭1種免許状に加え、中学校教諭1種・2種免許状(各教科)を取得した学生はそれぞれ48名、7名、特別支援学校教諭1種免許状を取得した学生は4名であり、比較的多くの学生が副免許を取得している。一方、教科教育コースでは、必須の小学校および

中学校教諭1種免許状に加え、他教科の中学校1種・2種免許状を取得した学生はそれぞれ14名、7名、特別支援学校教諭1種・2種免許状を所持した学生はそれぞれ18名、4名であった。特別支援教育コースでは、必須の小学校・特別支援学校教諭1種免許状に加え、中学校1種・2種免許状を取得した学生はそれぞれ10名、1名であった。以上のように、4学年分の定員920名に対して、必須の教員免許状以外の1種・2種免許状を取得した学生はそれぞれ94名(10%)、19名(0.021%)であるが、中学校の複数教科の免許状を取得した学生は1種・2種免許状を合わせてわずかに21名(0.023%)である。

また、副免許の教科は、1種免許状では「英語」(22名)、「数学」(19名)、「国語」(15名)に大きく偏っている。2種免許状では「英語」が9名いるが、全体的に少ない。一方、学校現場から必要とされている「技術」、「家庭科」、「美術」の1種免許状と他教科の1種免許状をもつ学生は、「技術・理科」1名、「家庭科・国語」1名、「家庭科・保健体育」

表5. H27-30年度副免許一括申請件数(合計)

【1種免許】

専門領域	国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	保健体育	技術	家庭科	特別支援	計
教育基礎	7	2	10		9						1	29
心理発達	4	2	3		3			2			3	17
日本語	1				5							6
国語						1					3	4
社会					1	1					2	4
数学	1									1	2	4
理科			1					2			1	4
英語												0
音楽											2	2
美術												0
保健体育	1				1					1	2	5
技術				1								1
家庭科	1							1			6	8
特別支援			5		3	1	1					10
計	15	4	19	1	22	3	1	5	0	2	22	94

【2種免許】

専門領域	国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	保健体育	技術	家庭科	特別支援	計
教育基礎					4			1				5
心理発達			1									1
日本語					1							1
国語											1	1
社会					1						1	2
数学					1			1			1	3
理科												0
英語											1	1
音楽												0
美術	1											1
保健体育												0
技術								1		1		2
家庭科					1							1
特別支援					1							1
計	1	0	1	0	9	0	0	3	0	1	4	19

2名「数学・家庭科」1名、他教科の2種免許状をもつ学生は、「技術・保健体育」、「技術・家庭科」、「家庭科・英語」各1名と極めて少ない。教科によっては、2種免許状を取得するのに必要単位数が1種免許状と大差ない状況であったことも、2種免許状取得者が少ない原因の1つである（例えば、理科の「教科に関する専門的事項」の科目では1種・2種ともに20単位の取得が必要である）。

そこで、学校現場からの要請に応えるべく、令和3年度の入学生より、中学校教諭1種免許状を取得するのに必要な単位数28単位（「各教科の指導法」8単位、「教科に関する専門的事項」20単位）に対し、中学校教諭2種免許状を計12～15単位で取得できるようにカリキュラムを再編成した。また、特別支援学校教諭免許状については、従来、1種は29単位、2種は20単位必要だったところ、それぞれ23単位、14単位で取得できるように再編成した。（いずれも教育実習を除く。）

表6に、H31年度入学生の副免許取得希望調査結果（1年次10月に実施）を示す。約3分の1の学生が、可能であれば副免許の取得を希望している。従来のカリキュラムでは2種免許状の取得にも努力を要したが、令和3年度入学生からは、卒業に必要な単位数総計から必修科目の総単位数を引いた余剰単位数は4～11単位あり（図7）、無理なく2種免許状を取得できるように改編した。

表6. H31年度入学生の副免許取得希望調査結果（1年次10月に実施）

	配属数	回答数	自領域 必須免 許のみ	副免許 取得希 望者数	内訳（自由記述）
教育基礎	18	15	9	6	社会（1種）、社会（2種）、特支（1種）、特支（2種）、 「国語（1種）+音楽（2種）」、不明（2種）
心理発達	22	22	10	12	国語（1種）、国語（2種）、社会（1種）、音楽（1種）、 美術（1種）、「社会 or 英語（1種）」、体育（2種）、 英語（2種）2名、特支（1種）2名、特支（2種）
日本語	7	7	3	4	国語（1種）、英語（2種）、特支（2種）、不明（1種）
国語	21	21	16	5	社会（2種、小は小2）、数学（1種）、英語（1種）、特 支（2種）、不明（2種）
社会	36	34	29	5	特支（1種）、特支（2種）2名、「国語（1種）+特支 （1種）」、「家庭（1種）+特支（1種）」
数学	24	21	12	9	社会（2種）、技術（1種）2名、英語（2種）、特支（1 種）3名、「社会（1種）+特支（1種）」、「国語（1種） +理科（2種）+特支（2種）、小は小2」
理科	17	15	12	3	「英語（2種）+特支（2種）」、「数学（2種）+特支 （2種）」、「数学（2種）、小は小2」
音楽	13	13	11	2	体育（2種）、特別支援（1種）
美術	7	7	1	6	国語（1種）、英語（1種）、技術（2種）、特支（2種）、 「社会（2種）+特支（2種）」、「国語（2種） or 数学 （2種）+特支（2種）」
保健体育	24	24	17	7	数学（2種）、美術（2種）、英語（2種）、「国語（1種） or 特支（1種）」、特支（2種）、「英語（2種）、体育 も2種」、「不明（2種）、小は小2」
技術	10	7	4	3	体育（1種）、家庭（2種）、「家庭（2種）+特支（2 種）、技術も2種」
家庭科	11	10	9	1	「英語（1種）+特支（1種）」
英語	12	11	8	3	国語（1種）、国語（2種）、音楽（1種）
特別支援	18	17	9	8	国語（1種）、英語（1種）3名、英語（2種）2名、「数 学（1種）+社会（2種）」、社会（2種）
計	240	224	150	74	



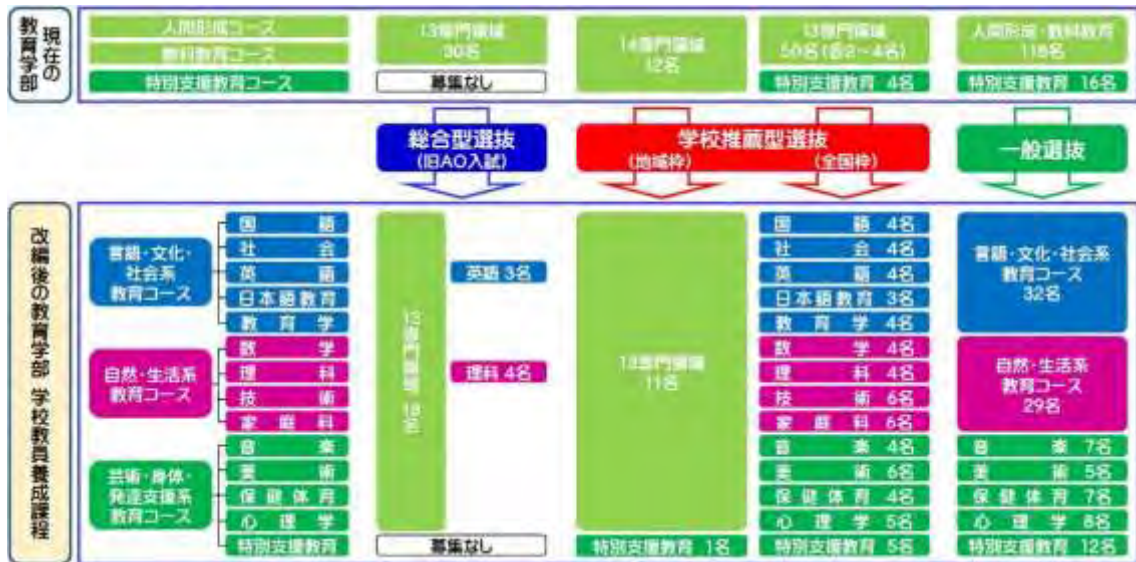
表 7. 卒業に必要な単位数

専門領域		日本語教育 教育学	国語・社会・英語・ 数学・理科・技術・ 家庭科・音楽・美術・ 保健体育	心理学	特別支援 教育
全学教育科目		16 以上	16 以上	16 以上	16 以上
学部 教育科目	課程共通科目	基礎演習科目	4	4	4
		基盤教育科目	69 以上	69 以上	69 以上
	専門科目	専門領域科目	26 以上	28 以上	24 以上
		中学校・特別支援 学校実習科目		3	
	卒業研究関連科目	6	6	6	
総計		130 以上	130 以上	130 以上	130 以上
余剰単位 (総計－必修科目の総単位数)		9	4	11	9

### 教育学部の組織改編に伴う令和3年度入学者選抜の変更と課題

教育学部の組織改編に伴い、令和3年度入試（令和2年度実施）より入学者選抜を変更した。本学全体の組織改編により、教育学部の学生定員は230名から200名に減少したが、募集枠・募集人員の変更（図1）などにより、教員志望度がより高い学生を選抜し、教育現場のニーズにマッチした教員を養成することを目指した。

図 1. 教育学部の組織改編に伴う令和3年度入学者選抜の募集枠と募集人員の変更



#### (1) 総合型選抜

小学校教員になりたい人を求める選抜である。教育現場より、英語または理科の専門性を持つ小学校教員の養成を求められていることから、令和3年度入試より、英語と理科の専門領域の募集枠を設けることとした。募集人員は30名から25名（英語枠3名、理科枠4名、領域選択なし18名）に変更した。令和3年度は英語枠は受験者数不足のため、

理科枠は第2次選抜合格者に学校推薦型選抜合格者が4名も含まれていたため、両領域とも定員割れとなったが、各2名の合格者を出したことは、両領域を設定した意味があったと考える。広報を充実させ、受験者をさらに増やすことが今後の課題である。

## (2) 学校推薦型選抜

小・中・特別支援学校等の教員になる強い意欲を持ち、児童・生徒の育成に熱意を持つ人で、かつ、学校長がその人物及び能力等に責任を持って推薦できる人を求める選抜である。総合型選抜および学校推薦型選抜合格者は、一般選抜合格者に比べ教員就職率が高いことから、募集人員を75名に増員し、総合型選抜と合わせて100名(定員の50%)とした。また、教育現場のニーズに応え、中学校教諭免許状や特別支援教諭免許状を持つ小学校教諭、複数教科(特に技術、家庭科、美術を含む)の免許状を持つ中学校教諭、特別支援学校教諭免許状を持つ中学校教諭、日本語教育や心理学の専門的知識を持つ教諭を育成するため、令和3年度より当該専門領域の募集人員を増員した。特に全国枠の技術・家庭科・美術専門領域の入学者には、副免許の取得を強く推奨することとしているが、4年間の教育を通して複数教科の免許状もつ中学校教員、あるいは特別支援学校教諭免許状を持つ小学校・中学校教員を養成できるかが重要な鍵である。

## (3) 一般選抜

教職大学院との連携による、よりきめ細やかな教員養成を目的として、コース別に選抜を実施した。さらに、芸術・身体・発達支援系教育コースは専門領域別に学生を募集した。音楽・美術・保健体育専門領域受験者には実技試験を課し、入学後はその領域に進むものとした。従来、音楽・美術・体育の実技の受験者は入学後にその実技以外の専門領域に進むことが可能であったが、教員になる学生が少なかったことから、実技試験の教科と同じ領域に進むことに変更した。令和3年度入試ではコロナ禍ということもあり受験者数が減ったが、教員志望度の低い受験者が出願時点でふるい分けされ、より教員志望度の高い受験者のみが受験したと考えたい。

いずれの入学者選抜においても面接試験(令和3年度入試では、面接試験に代わる動画提出)を導入し、教員志望度の高い学生を選抜しており、4年間の教育において教員志望を維持しながら教員養成をしていく必要がある。

\*1 文部科学省「【概要】免許外教科担任制度の在り方に関する調査研究協力者会議報告書」より一部引用

[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2018/09/20/1409427\\_002\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/09/20/1409427_002_1.pdf)

\*2 文部科学省「免許外教科担任の許可件数(都道府県別)」より一部引用

[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2018/09/20/1409429\\_006\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/09/20/1409429_006_1.pdf)

\*3 文部科学省「免許外教科担任の許可件数(教科別)」より一部引用

[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2018/09/20/1409429\\_008\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/09/20/1409429_008_1.pdf)

\*4 文部科学省「複数教科免許状保有による教員採用試験での加点の実施状況」より一部引用

[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2018/09/20/1409429\\_014\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/09/20/1409429_014_1.pdf)

\*5 文部科学省「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)概要」より一部引用

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm)

#### 4. 大学における教職インターンシップカリキュラム

## コロナ禍におけるスクールデー実践 B と C の遠隔実践

横浜国立大学 関戸英紀、金馬国晴、橘高佳恵、海老原修、杉山久仁子

### 1. スクールデー実践科目について

教員養成では、理論と実践の往還による指導力の育成が求められており、本学部では、学校現場の実習関連科目として1年次「教育実地研究」、2年次「スクールデー実践」、3年次「教育実習」、4年次「教職実践演習」を設定している。

2年次の「スクールデー実践」は半期科目で他の授業が入らないスクールデー（現在は金曜日）に実施し、「教育実地研究」の振り返りの下、実習（観察、実験、製作、制作等を含む）を行う。内容は次の3つに分かれており、学生はいずれかを選択履修する。スクールデー実践Aでは、専門的見地からの教材理解をテーマに、大学の専門科目の授業では触れることのできない、実社会と教材との関わりに重点を置いて学ぶ。スクールデー実践Bでは、小学校現場に出向き、公立小学校の校長経験者の外部講師（SV=スーパーバイザー）の実務経験をいかした実践的教育プログラムを行う。スクールデー実践Cでは、子どものかかわりをテーマに、小学校又は中学校にアシスタントティーチャーとして出向き学校現場での授業支援等に取り組む。スクールデー実践Aは学生が所属する専門領域単位で指導が行われ、スクールデー実践BとCは学校現場での活動が中心となるため、関連の委員会が管理を行っている。

### 2. 今年度のスクールデー実践 B 及び C の実施内容

コロナ禍において、教育実習以外の学外での活動は学部の方針で原則禁止することになり、スクールデー実践BとCについてはオンライン（リアルタイム方式）で授業を実施することとした。スクールデー実践Bについては、SV6名を年度当初から依頼していたため春学期履修者23名で実施、秋学期にはスクールデー実践B履修者12名とスクールデー実践C履修者107名、合計119名で、SVを11名に増やし実施した。大学の教員4名（専門は、教育学2名、特別支援教育、家庭科教育）が、この授業に委員会の担当として参画した。内容は、SVと大学教員で協議をして決め、春学期に先行実施したものを改善する形で秋学期に実施した。秋学期の実施内容を以下に示す。

No	日 程	内 容
1	10月9日（金）	スクールデー実践B&C ガイダンス
2	10月16日（金）	「学校現場実践に向けて」講話
3	10月23日（金）	踊り場I 「学力をどうとらえるか」講話＋動画視聴 フィンランド教育&日本の教育
4	10月30日（金）	「21CoDOMos」 授業研究 国語科
5	11月6日（金）	「21CoDOMos」 授業研究 体育科
6	11月13日（金）	「21CoDOMos」 授業研究 特別活動

7	11月20日(金)	「21CoDOMos」 授業研究 家庭科
8	11月27日(金)	踊り場Ⅱ「現場の教師たち」講話 教科共通で大事なこと・教科指導について
9	12月4日(金)	「21CoDOMos」 授業研究 算数科
10	12月11日(金)	「21CoDOMos」 + 公立小学校授業動画 授業研究 体育科 ～2校の比較～
11	12月18日(金)	公立小学校授業動画 授業研究 算数 ～グループ学習2校比較～
12	1月8日(金)	踊り場Ⅲ「特別ではない特別支援教育」講話他 報告会に向けて説明①
13	1月22日(金)	踊り場Ⅳ「求められる教師像」講話 報告会に向けて準備②
14	1月29日(金)	踊り場Ⅴ「教育現場風景 先生方からのメッセージ」 横浜市立小学校6校で取材した動画から(6グループ) 報告会に向けて準備③
15	2月5日(金)	最終報告会

ここで「21CoDOMos」と書かれているのは、東京学芸大学・次世代教育研究推進機構が作成された「21世紀のコンピテンシー育成のためのオンライン動画サービス」である。今年度4月末に遠隔授業での活用を呼びかける連絡があり、内容をSVと大学の教員が視聴し、複数の授業動画を選択して使用した。

毎回の授業は1・2限の時間帯(8:50～12:00)で実施した。専門領域が異なる学生が班を構成するようにして11の班に分け、SVが1つの班を指導する形式とした。毎回授業後に振り返りレポートを作成し、SVに提出し、それにSVがコメントを入れて返却することとした。

授業の流れの例を以下に示す。

**【第4回目】授業研究 国語**

- (1) 班：朝の会 (20分)
- (2) 全体：担当SVからの授業に関する説明 (10分)
- (3) 全体：授業動画視聴 (45分)
- (4) 班：グループ協議 (60分)
- (5) 全体：グループ報告(3つの班)とSVの解説 (15分)
- (6) 班：帰りの会 (15分)
- (7) 全体：諸連絡 (5分)

**【第12回目】踊り場Ⅲ 特別支援教育**

- (1) 班：朝の会 (15分)

- (2) 全体：「特別ではない、特別支援教育」(SVの講話)(30分)  
「問題行動！クラスワイドな支援から個別支援へ」(大学教員の講話)(20分)
- (3) 班：グループ協議(50分)
- (4) 全体：グループ報告(4つの班)とSVの解説(20分)
- (5) 班：帰りの会(20分)
- (6) 全体：諸連絡(5分)

グループ報告は、3つもしくは4つの班が行い、それ以外の班には、授業後に授業支援システムの掲示板に自分の班の協議報告を提出させ、学生間、SV、大学の教員間で共有できるようにした。

なお、この授業では常に次の視点を大切にした。

- 目で見たこと、感じたことを大切にしよう！
  - 通りすぎない！気づく！
    - ・その子どもの背景まで思いを巡らす。
  - 一つの授業
    - ・教科としての目標(一時間という単位)
    - ・子どもと子どもの関係を築く
- 教師：温かい居場所づくり、 子どもと子ども：絆づくり

### 3. 遠隔で実施をした結果

スクールデー実践BとCは週1回、約3か月間学校現場で実際に活動をする授業であり、その活動が中止になりオンライン授業に変更になったことで、この授業が開始された当初は学生の大半は戸惑いを持っている様子であった。

しかし、一つの授業動画や講話を視聴したのち、約1時間のグループ協議でSVと学生が意見交換をし、さらにはグループでの報告を共有することで、授業を様々な視点から見るできるようになり、学校現場をよく知るSVからの指導のもと多くの学びをし、この授業に参加する姿勢が変化していった。この授業の成果の詳細については、直接学生指導に当たったSVにまとめていただいたので、それを参照されたい。

SVと大学教員がこの授業を運営するために重要な役割を果たしたのは、授業後の打ち合わせであった。その日の授業の振り返り(学生の反応などの共有も含む)と次回の授業に向けて議論をした。この打ち合わせは当初の予定の1時間で終わることは少なく、長い時には2時間以上に及んだ。SVの学生指導がこの授業ではとても重要であるが、大学教員と一緒に授業を運営・参画することで、大学教員も様々なことを学ぶことができた。

最後に、ご協力いただいた11名のSV、山崎信也先生、永池啓子先生、吉原健司先生、前田隆先生、原忠雄先生、久保田節子先生、保科泉先生、門脇文隆先生、田中綾子先生、山田アイ子先生、伊藤雅代先生に感謝する。

「大学の講義のみで教育実習に臨める自信が全くなく不安でいっぱいだった。ディスカッションを軸とする本講義を通して非常に安心した。実習は、大学での学びとは大きく異なり、知り合いもいない環境で主体的に動く必要がある。さまざまな壁にぶつかると思うが、大学の同級生と支え合い、周りに進んで相談し『失敗を喜び』とする実習としていきたい。」

これは、受講した学生の言葉である。

日常的・継続的教育実習を目的としている授業に、その日は突然やってきた。令和2年4月7日新型コロナウイルス感染拡大防止に係る「緊急事態宣言」が政府より発せられ「授業は対面式では行わず、開講する授業は全て授業支援システムやインターネットを活用した遠隔による方法で開講することとしました。」学長からの発出であった。現場に出向くことや実習が叶わない学生たちにこれからどのような学びの場を提供すればよいのか大学教員とスーパーバイザー（以下SV）との協働による暗中模索での授業が開始された。

そして、コロナ禍という世紀の苦難は、普段は気付かずにいた大切なものを私たちに見せてくれた。コロナ禍を越えてもぶれないこととして、成果としたい3点を次に挙げる。

## 1 教師という仕事の面白さ、奥深さを掴むこと

「子どもの高まりや伸びようとする姿を見るためには、惜しみない力を発揮する。そんな教師や教師たちがいる学校にどの学生も出会えればよいが・・・」

これが学生を連れて行く際に最初に願うことだ。あこがれや志ほどそこへ向かう思いを強くするものはない。しかし、学校の現況は言わずもがなである。往々にして保護者対応や生徒指導に翻弄されている現実や子どもと向き合う時間にゆとりのない教師の姿を見せつけられることがある。これでは教師になる夢に萎えてしまう学生も生まれることだろう。

そこで初めに、教師の仕事の面白さや奥深さを掴むモデリングである。現場に出る前に鳥の目のように様々な教師がいることを知りその像への視野を広げたり、虫の目のように子どもを見る目の奥深さを知らせたりしたい。ひと昔前のように、失敗は多いけど自分のやり方で指導法を獲得していき、それゆえに応用も効いていた教師の育成方法では、失敗をしたがらない、失敗を恐れる今の若者には合わないのかもしれない。ただ、今の若者は教えたことを素直にやろうとすることができる。動画を介して議論をし、学生一人一人が具体的な動きをモデリングしていくことはとても有効であることが本授業を通して窺えた。

例えば、東京学芸大(21CoDOMos)及び横浜、広島为学校等の複数の教師たち、各々の教師が果敢に授業に挑む姿を介して、学生間の協議を中心とした授業では、同一の教師の姿であっても賛否両論、議論を通して学生から「そういう見方もあるのかと考えさせられた。自分のこれまでの経験や知識だけに縛られて観ていたことに気付かされた。」という声が多く上げられた。一つの授業、子どもが発する言葉や表情、行動をどのように観て評価するのか多様な考えに触れ、その深さに気付いていった。また、怯まず自己開示し授業に挑み変わ

り続けようとする教師たちの姿は、学生の「失敗」という言葉のイメージを変えていった。

## 2 「何を観るのか」漫然とではなく、視点をもって観ること

現場に出て、先輩の教師の動きを実際に観ていくことも勉強の一つだが、そこで何を観るかによって得るものが違って来る。ポイントを掴んで観る人と、漫然と観ている人では当然差がついてしまう。それを本人任せにするのではなく、きちんと教育する仕組みを作りたい。そのために、スクールデー実践 B では半期にわたり継続して学級づくりの醸成や個の子どもの育ちについて課題をもち日常を観ていくことを大切にしたい。当然、オンラインにおいては、継続して一つの学級や個を追い続けることは叶わなかった。だが本講義の後半には、二つの授業映像を視聴し、子どもの学び合いの様子を比べて分析する手法を取り入れた。

例えば、東京学芸大学附属小学校と横浜市立学校、市立学校と他県の学校、同一教科で同じねらいをもった授業のシーン二つを比べ分析させる。学生から多様な見方や考え方がでた。「せっかくの少人数のグループ学習でも既に優劣がついてしまっている」「説明し合うことで優れた子も深い学びにつながっている」「わからないが堂々と言えてそこから出発する学級の温かい風土が大事なんだ」等、発見の共有によって、学生は「子どものどこを観るのか、どのように継続的に観ていけばよいか」を掴んだ。発見した学びは汎用的な理解として、現場に出た時に他のことにも転用できることだろう。理想とする教師の真似をするといっても簡単ではない。人の動きをうまく真似ができるというのはひとえに感性にもよる。本質を掴むことが上手な人はあっという間に上達するだろうが、本人任せにすればよいという時代ではもうない。新任もベテランも現場にいれば一定の結果が求められる時代、現場に送り込む前に「何を観るのか」「どのように継続して観ていくのか」その視点に気づかせたり価値づけしたりすること、掴んだポイントで模擬授業等実際に学生にやらせてみる事が重要であることを捉えることができた。

## 3 子どもの心を知ること～見逃さない、気付く～

ある回で、体育の授業を視聴した後のグループ協議で、「砂遊びをしている子どもに何度も注意をする教師の声掛け」に班全員がこだわった時があった。議論を通して「砂遊びをしている子には、砂遊びに至る理由がある。」という結論に至った。オンラインの中でも、はっとして気付かされた様子の学生の表情が見て取れた。

そして、令和3年2月の最終の発表会。ある学生が、本講義を通しての自分の大きな学びとして、小学校の頃、特別支援教育を受けてきた経験から、「この発信が私のなすべきことではないか」と訴えかけた。「好きなことは集中できるんです。私がこの子であったら砂いじりしていることは遊びではない。『どうしよう。つまらない。わからない。すきじゃない。つらい等』という思いからの逃避です。それを分かってほしい。これが子どもの目線に立つ、子どもの心を知ることではないか、教師としてそのような子どもの心を見過ごさないで気付いてほしい。」経験者からの真意の発信は、多くの学生たちの肺腑を突いた。



大村はま氏（『教えるということ』共文社）の言葉を学生に送った。

「研究する、研修するということには、私たちがそうした力を磨くということだけでなく、もう一つ大切な意味があります。それは、私たちが子どもたちと同じ天地にいるための工夫の一つでもあります。研修はつらいし、やってもやっても急には効果が上がらないし、わかったような、わからないような、…さまざまな苦勞があります。そしてまた、少しの喜びもあるものです。…自分を見つめたり、自分の到らないところを伸ばそうとしたり、それから高いものに憧れたり、一步でも前進しようとしたりするという、それはそのまま少年という育ち盛りの人たちのもった自然の姿なのです。子どもというのは、身のほども忘れて、伸びようとしたり、伸びたいと思っていたりする人です。… その子どもたちと同じ気持ちになることが、まず大事でしょう」

彼らが現場に出向く前に、子どもと向き合う際の基底に触れたことは、現場での学びをより深くしていくことだろう。

同時に、この授業は、SVの小学校ベースでの学びと教員の大学ベースでの学びの「往還による実践と理論の融合」の具現化であったと捉えている。学生間の議論を核として、大学教員とSVが協働する形での授業展開が叶った。学生の課題を捉え、ある時はSVの豊かな経験からの話であったり、大学教員の理論的裏付けであったりした。一方、学生の真意から、SVも大学教員も今後補填していきたい授業の視点を窺い知ることができた。

最後に、一人の学生の感想を紹介して結びたい。

「日本にもフィンランドのような教育を取り入れたいとしたときに、ネックになってくるのは大人の側が順応しきれないことだと思う。学歴社会の考え方について、子供に対する意識、教育への関心、これらは簡単に変えられるものではない。制度の導入や、法律の整備は行えたとしても、慣習・文化・思考は変えていくのに時間がかかる。だから無理ではなく、いきなり理想を実現することは難しくても、教員一人一人の意識で、変えていけることは多くあると思う。一担任にできることは微力で、日本の教育というものに対しては無力かもしれない。しかし、私はまずは自分のできることから少しずつ、この国の教育をより良いものにするために、意識し、改善していきたい。理想とする教育への程遠さを改めて実感させられるとともに、自分がどうしていきべきなのか、何ができるのかについても深く考えることができた講義だった。」

## 養成・採用インターンシップの実践例

横浜国立大学教育学部 竹田惇子、物部博文

### 趣旨：

- ・教員として必要な資質・能力を身に付けるための実地研修を目的とする。
- ・教員採用試験に合格した4年生を対象に、教職に就く直前の研修として実施する。
- ・秋学期、週1回の分散型教育実習である。

ただし、本年度は新型コロナウイルス感染症の流行のため、学生が小学校の重点研究等に実際に参加することは非常に難しかったため、横浜市立小学校の重点研究をはじめとする授業を撮影した動画を、参加学生とSV(スーパーバイザー)で観察し、授業についての振り返りと関連する内容(思考ツール、授業分析等)についてディスカッションを行った。

### STとして参加した学生：

就職支援室を通して横浜市小学校教員採用試験合格者30名に電子メールにより参加を呼びかけ、このプログラムにエントリーしてきた2名とSV(竹田)が教員採用試験対策を担当していた神奈川県小学校教員採用試験合格者1名の合計3名が本プログラムに参加した。

- 4年 家政教育専門領域(横浜市 小学校内定)
- 4年 家政教育専門領域(横浜市 小学校内定)
- 4年 心理発達専門領域(神奈川県 小学校内定)

### 実施形態：

<実施期間>

2020年11月11日～2021年2月17日の合計8回(1, 2時限目)

<授業動画の撮影>

授業動画の撮影については、物部が担当し、i-padとコンデンサマイク、三脚を用いて授業開始から授業終了までとその後の振り返り会(講師 竹田惇子)を固定カメラにて撮影した。

日時	学校	学年・教科・単元・授業内容
2020.10.16(金)	戸部小学校	1年・生活科「わくわく つうがくろたんけん」 6年・総合「とべっとスタンプ」
2020.10.30(金)	戸部小学校	5年・総合「ブラリ戸部動画」

		5年・総合「音で戦うゴールボール」
2020.11.05（木）	大岡小学校	5年・総合「Happy Movie！5-1があなたの輝きを楽しく広めます」 6年・総合「子どもから大人まで夢中で遊べるすごろくをつくろう」
2020.11.09（月）	権太坂小学校	6年・総合「つたえよう ひろめよう ふれあい樹林」
2020.11.13（金）	池上小学校	4年・総合「みんなで体を動かそう！」 5年・総合「お囃子で感謝の気持ちを届けよう！」
2020.11.30（月）	大岡小学校	4年・総合「体も心も元気に！4-2ハッピー体操」 6年・総合「まちの健康運動アプリで地域を元気にしよう！」
2020.12.16（水）	附属鎌倉小	5年・算数「混み具合」

#### <実施内容>

撮影した動画ない内容を竹田および物部で協議し、多様な視点から授業を分析するという視点から以下に示した8回分の授業動画を視聴した。動画の視聴後、授業の内容についてSVとの振り返りを行った。その内容について、学んだこと、気付いたことをレポートにまとめ、提出することとした。さらに、7回目は、道徳の授業のつくりかた等、4月から教職に就くにあたって学生が不安に関している授業についての講義も実施した。

実施に当たっては、学生間のディスタンスを十分にとるとともに、換気をしながら実施した。

- 1回目（11月11日）：5年・総合「ブラリ戸部動画」
- 2回目（11月19日）：5年・総合「音で戦うゴールボール」
- 3回目（12月2日）：6年・総合「子どもから大人まで夢中で遊べるすごろくをつくろう」
- 4回目（12月08日）：4年・総合「体も心も元気に！4-2ハッピー体操」
- 5回目（1月13日）：5年・総合「Happy Movie！5-1があなたの輝きを楽しく広めます」
- 6回目（1月20日）：5年・算数「混み具合」
- 7回目（2月3日）：講義・道徳授業のつくりかた
- 8回目（2月17日）：2年・体育「ゲーム運動」

#### 成果と課題：

##### <成果>

- コロナ禍で大学が殆ど閉じられ、授業もリモートなので、学生はこれまでにない不安を抱えていると思われる。4月から教職に就くことが決まっている4年生にとってはなおさらであろう。受講した3人の学生も、開講当初は不安を感じていた様子であった。しかし、不安に思っていることや疑問に思っていることを率直に話せたことで、次第に解消できてきた様子であった。4月から教職に就くことや子どもとの出会いに期待し、楽しもうという意識が出てきたことが何よりの成果である。
- これまでのように、実際の授業を参観したり、児童と直接かかわったりすることが

できなかったが、ディスカッションの時間はとることができた。ビデオで多くの授業を見て、ディスカッションをしたり、レポートを書いたりすることを通して、現在の教育現場の様子や教師の役割などについて具体を通して考えることができ、自己の見方や考え方を広め、深めることができた。

- 毎回、授業を視聴し、詳細な授業記録をとることや直後の討議、レポート提出を重ねたことで、授業を分析的にみとる力が育ってきている。感覚的な良し悪しでなく、単元構成とのかかわりや、本時問題、教師の発問、板書などについて、的確によさや課題を指摘できるようになってきている。自分の意見として、進んで述べたり、レポートに記述したりするなど、大きな成長が見られた。
- ビデオを通してではあるが、児童の意見や表情から、一人ひとりのよさや個性をみとることの大切さを感じ取ることができた。教育実習やアシスタントティーチャーでの経験を結びつけて考えようとしていた。直接関われないことの限界はあるが、児童への学習指導、生活指導について話し合ったことは、これからの指導に活けると考える。

- 3年生の教育実習からはしばらく間があり、しかも今年はアシスタントティーチャーや体験学習ボランティアなどの活動を全くできていないので、学校との距離を感じていることが伺えた。これが、教職への不安と繋がっているのであろう。

本年は、直接関わることはできなかったが、ビデオを通して、児童や教師の活動を観察することで、現在の学校の様子を認識することができた。このような状態であっても、学校との距離感を少しでも縮め、それなりの成果をあげることを実感できた。

#### <課題>

- 4年生でのFWは、大学から教職にスムーズに橋渡しができる有効なシステムであると考えられる。SVが学生に、授業について、児童指導についてじっくり指導することができる。教育実習とFW、両者を学生に体験させることで、それぞれの特色を生かし、教員としての資質・能力を高めることができる。

しかし、これを進んで受ける学生が少ないのが現状である。今年はコロナ禍で学校閉鎖という特殊な環境であったが、その中でできるだけのことをしようという大学の配慮に応える学生が少ないのが残念である。

- 次年度はどのような状況になるのか見通しは立たないが、多くの学生がFWを体験できるよう、教育実習と合わせて、制度を見直していくことも必要であろう。教育学部として、学生に必要な資質能力を育成することを大切にしたい。
- 教職を希望する学生が減少していることは、これからの社会を担う児童・生徒を育成するうえで、大きな問題である。特に教育学部においても、教職を希望しない、つかない学生がかなりの数に昇ることに着目したい。

教職は確かに楽な仕事ではなく、日々の研鑽や研修、他の教職員や保護者、地域と

のコミュニケーションも求められる。報道でも、校内暴力や児童生徒指導の難しさ、いわゆるモンスターペアレントなど保護者対応の難しさ、過酷な勤務状態などが連日取り上げられる。

しかし、教職は「やりがい」のある魅力的な職業である。子どもと出会い、学びを作り上げることは、自分の人生をも豊かなものにしてくれる。このことを伝えるためにも、魅力を具体で伝えることができるFWは大切な役割を果たせると考える。

学生に、漠然とした不安から脱却させ、教職への夢と希望をもてるようにすることは、教育学部としての使命ではないだろうか。制度の充実を望みたい。

### 資料：学生のレポート&感想

学生 A:

全8回の講義を経て、学習指導と学級経営、各々1点ずつ特に新任でも意識し、実施できそうな事において学びをまとめていきます。

学習指導において学んだ点は「見通し」です。もちろん、学級経営における「見通し」も学びましたが、今回は学習指導に焦点を当ててまとめます。今回の講義で一口に「見通し」といっても様々な種類のものがあるという事にも気づきました。

まず「教材研究」をすることで教師が持てる「見通し」です。今までの講義で一番多く見受けられたものであると感じました。授業内容での学習目標達成への見通し、単元終了後になってほしい姿への見通し、単元間、1年間、そして教科間とどんどんと学びが繋がっていく中で「見通し」を持ち続けるためには、日々の教材研究がいかに大事かを学びました。実際に現場に出るまでに色々な知識を蓄えようと現在勉強していく中でも特に感じるものです。調べれば調べるほど奥が深いものですし、学ぶことがとても楽しいので、子どもの前に立つようになってからも大切にしていきたいです。

次に教師が授業内容に組み込み、児童が意識できる「見通し」として「思考ツール」があげられます。今まで、授業を考えたり実習において授業実施したりする中でほとんど通ってこなかったものでした。しかし、講義を受ける中で実際にPMIを使用し、自分の考えがまとまる体験を経て、このようなツールを上手に使用していくことが子どもにとっても思考の流れや、どのように考えたらいいかどうしたら解決できるかなどの様々な「見通し」を持つきっかけになると気づきました。ツールの種類やツールの使用用途について自分自身がしっかり勉強して、子どもが使用用途によって思考ツールも自在に使えるようにどのようにこちらから発信していくのか等も含めてもっと勉強していきたいです。

最後に授業を実施する中での教師の「見通し」です。子どもの考える時間を確保するためにも興味を持てるような導入を手短に行うことや子どもの実生活や体験から学びを引き出し、生活に戻すという学びの流れ、そもそもこの授業で何をするのかを明確に持つ事などを学びました。ただ漠然と授業を行うのではなく、どのように組み立てていくのかそしてどのよ

うな姿に子どもを育てていきたいのかを明確に自分の中で持てるように、日々の勉強に励みたい。また、今回学んだ様々な授業実践を参考に少しずつ自分の武器を増やしていきたいと思います。

学級経営において学んだ点は「声掛けの仕方」です。子どもがのびのびと生活できるようにしたいと漠然と思っていたものを言語化したり実践としての形として教えてもらったりしたものです。

まず、「できたら褒める」という事です。どうしても「～できていない」であったり「～しましょう」という声掛けであったりをしがちですが、個に意識を置きすぎると集団がばらつくといったことに気づきました。声掛け自体も子どもの特徴や性格、得意分野等をしっかりと把握したうえで、クラスでその場面の主人公になれるようにすることでクラスの子どもたちが互いの良さに気づけると感じました。そのためにも日々の学級生活で特に意識していきたいなと思います。そして「できたら褒める」と同時にとても大事なことは「失敗を成長に変えられる空気づくり」であると学びました。失敗する子を笑ったり、間違いであることを強調したりするような空気や行動はしっかりと注意し、みんなが楽しく学べるようなクラスを作りたいです。

次に「全員が参加できるクラスづくり」への「声掛け」です。前述したものに加えて、積極的に全員が手を挙げられるようなクラスづくりについて学びました。全員が手を挙げて、自信をもって発言している授業を見させていただく中で、先生が聞いてくれているという安心感や全員でよいものを作り上げようという統一した意識を子供から感じる事ができました。自分の意見を持てるように小さな所から、そしてどうしてそれが必要なかの必要感を子どもに持たせられるような授業展開等様々な工夫を学びました。特に「手を挙げられていない子に注目する」といった点は今までになかった視点を獲得する事ができました。私自身、小学校で手を挙げてどんどん発言していくタイプでしたが中学校では全く発言ができなくなってしまった経験をもっています。その経験から、全員が発言しやすい環境を作り上げるためには何ができるのであろうとと思っていたので今回学ぶことができてとても嬉しかったです。手を挙げられていない子がどこで困っているのか、どのような状況かを見取る事の大切さやサポートのバリエーション等を増やす大事さにふれ、精進していきたいと強く思いました。

以上 2 点が特に今回の講義で学んだ点として挙げられますが、それ以上にはるかに多くの学びを得る事ができたと感じています。このレポートを書くにあたって学びの履歴を見返しましたが、まだまだ自分で練れる所であったりまだ自分自身にはできないものであったりと様々なものを吸収できたのではないかと感じています。この学びを生かし、そして糧にして精一杯現場で生かし、自信の目標である「笑顔があふれる学級」を実現できるようにこれからも頑張っていきたいです。本当に貴重な機会をありがとうございました！

学生 B:

### 【総合的な学習の時間について】

今回の初等フィールドワークでは総合的な学習の時間について、体験学習と見通しの大切さを学んだ。

まず体験学習について、体験学習は児童にとって価値観や考え方を深めることに繋がることだけでなく、授業の話し合いにおいて児童の共通体験として活用していけると学んだ。特に印象的だったのは、大岡小学校の「元気にすごそう！ハッピー体操」という単元の話し合いの授業の体験活動である。話し合いの前に、児童はお年寄りの方と一緒に体操をしていたため、誰のために話し合うのかをイメージしながら話し合いに参加することができていた。また、児童が体操について根拠となる写真を見せながら意見を述べることで、周りから「お～！！」という声も聞こえ、説得力と活気のある話し合いが展開されていた。総合的な学習の時間の話し合いでは、児童一人一人が持っている価値観や知識量に差があるため、共通体験が無いと話し合いが空中戦になってしまい、ゴールへと進むことが難しいと思った。私も、総合的な学習の時間では、クラス全員が共有しあえる体験活動を取り入れていきたい。また、大岡小学校の先生のように、話し合いの必要なタイミングで写真やアンケート結果を提示し、児童の支援をしていきたい。そのためには児童がどんな考えを持っているのかを見取り、座席表を作成し、そこに書き込むようにして把握していく必要がある。

次に見通しについて、教師は必ず単元のゴールを見通しながら毎回の授業をしていくことが大切であると学んだ。そのため単元構想では、誰のために作るのか、どこで発表できるのか、どんな姿になって欲しいどんな学びがあるのかを見通す必要があり、時間をかけて構想を練っていきたいと思った。また、児童自身が何のために単元の学習を進めていくのかを理解できるようにしていきたい。本フィールドワークで拝見した大岡小学校の「Happy Movie! 5-1があなたの輝きを楽しく広めます」という授業の単元では、完成した情報番組を学校放送のどの時間に流すことができるのか、流してどんな効果があるのかを教師と児童が理解しておく必要があると学んだ。単元構想では、まず単元のゴールをしっかりと練り、そのゴールに迫るためにどんな活動が必要かを考えていくことが大切だと思った。また、単元のゴールを常に意識し、どのように1つ1つの授業の目標を達成していくかを見通していく必要があると学んだ。

### 【話し合い活動の充実に向けて】

今回のフィールドワークでは、話し合い活動を充実させる方法を学んだ。

まずは、グループワークの導入について、グループワークを導入する意味やタイミングについて学んだ。本フィールドワークで拝見した授業動画の話し合い活動では、時間が経つにつれて児童が「う～ん」と静かになったり、発言する児童が限られてきたりするようになっていた。その時に、動画内の先生方はグループ活動の時間を設けていた。このタイミングでグループでの話し合いにすることで、発言者が限定されることが解消され、再び話し合いが活性化する。このように、グループ活動は必要な時に効果的に取り入れていく必要があることを学んだ。

次に教師の出と待ちについて、児童の発言がある度に教師は話し合いに入るのではなく、深く頷きながらグッと待つことの大切さを学んだ。教師が児童の発言全てに「それ良いね」と反応してしまうと、児童は正解を言わなくてはいけないと思ってしまったり、教師に対して発言するようになってしまったりしてしまう。授業の主役は児童であるため、児童の発言量を多くして、児童同士の意見の交流を深めていく必要があると思った。初任では中々難しいと考えられるが、教師が出過ぎないようにして児童の発言で根拠が必要なときや、抽象的な発言があった時に教師が出て支援していききたい。そのためにも、授業準備に力を入れていききたいと思った。

最後に話し合いの流れについて、話し合いでは自力解決と練り上げの時間が大切であると学んだ。自力解決では児童が考えをクラスに共有して膨らませていき、練り上げでは児童が出した考えの中で一番合理的なものを導き出していく。また自力解決の時間に入る前には、必ず学習課題を提示し、児童がそれについて考える時間をとる必要があることを学んだ。例えば、算数の混み具合の学習では、「 $6\text{m}^2$ で9匹と $5\text{m}^2$ で8匹のウサギ小屋でどちらが混んでいるだろう」と学習課題を導入で提示する必要がある。また、教師は自力解決の時間から練り上げの時間に移る時に「今日わかったことをまとめよう」と短く簡潔な言葉で指示を出すことが大切であると思った。

以上のような教師の授業での立ち回り方を意識し、充実した児童の話し合い活動にしていきたいように学び続けながら実践していきたい。

#### 【まとめの感想】

竹田先生、物部先生、この度はとても貴重な学びの場を用意してくださり誠にありがとうございました。本フィールドワークでは、教師の授業での立ち回り方や、授業準備や教材研究についてもたくさんのお話を学ばせていただきました。私は特に、児童への指示を簡潔にすることや、導入の時間を短くしてスッと展開に入ることなどを心がけていく必要があると思いました。何より、児童と楽しそうに会話を交わす竹田先生の姿にはとても刺激を受けました。竹田先生のクラスの児童は安心感を感じながら授業を楽しんでいることがひしひしと伝わってきました。「教師は児童と一生繋がれる仕事」という竹田先生のお言葉を胸に、私も児童と心から触れ合い、私自身が教師という仕事を楽しんでいきたいと思います。4月から初任で大変なこともあると思いますが、本フィールドワークで学んだ知識をフル活用しながら一歩ずつ成長していけるように頑張りたいと思います！

学生 C:

○授業を見るとき視点

・PMI シート

授業でも生かすことのできる、P（プラス）、M（マイナス）、I（インタレスト）3つの視点で授業を見ることで、ただ授業を見るよりもより多くのことに気付けるようになりました。小学校での話し合いや人の話を聞いたりする授業で、児童がどんなことに着目して聞け



ばいいか悩むような場面があれば、活用していきたいと考えました。PMI シート以外にも、魚の骨やバタフライなど楽しくメモを取ることができそうなアイデアを頂いたので、授業内容に合わせて活用していきたいです。

#### ・授業記録

今回、初めて授業記録を取りながら授業を見ることをしました。慣れていないため、子どもの発言を全て書き取ろうとしてしまい、その間に授業が進んでしまうので、頭で要約しながらメモをする練習が必要だと感じました。記録をとるのはとても大変ですが、後で見返す際に、児童の発言や流れがよみがえってきて、振り返りがしやすくなりました。また、実際に書き出してみることで、児童がどんな時につまずいているのか、発問のタイミングはどうだったのか、教師の発言が多いのではないかなど、全体を通じた課題を見つけることができるともとても良い点だと考えました。

#### ・板書

板書は特に授業の事前準備が出る部分だと考えています。総合や国語での話し合いを分かりやすく簡潔にまとめる際には、児童の意見を予測し、構成を考えることが必要だと学びました。総合では、地域の方や専門家に話を聞いた際には、地域の方でまとめるのではなく、写真や名前を提示し、深いかかわりをもてるようにしたいと思いました。国語では、感情曲線も活用していきたいです。算数や理科の授業では、目標を明確に示し、何をする時間なのかを分かりやすくする必要がありました。また、授業の道筋を捉えられるような工夫として、毎時間のめあての提示と次の時間へのつながり（児童の発言などから）を意識した板書にしたいと思いました。

#### ○授業外での活動

##### ・授業中のクラス態度

授業中に落ち着かないクラスでは、休み時間や体育の時間に十分に発散できていないことがあるため、休み時間を利用してたくさん遊ぶことが大切だと学びました。また、反対に静かなクラスは、おとなしい子が集まっているからなのだと思いますが、そうではないのだと気付くことができました。静かで反応の小さいクラスでは、挙手することが怖かったり、自分の意見に自信がない子が多い可能性があるため、発言の価値付けや、友達の意見に反応する大切さを指導する必要があると学びました。

#### ○感想

今回の講義では、より実践的な学びを得ることができました。講義前の漠然とした不安が今はより具体的な不安に変わったので、実践と研究を重ねながら、一つずつ不安を失くしていけたらと思えるようになりました。特に、4月からの期間の過ごし方で、クラスの授業態度や雰囲気が変わってくると学んだので、授業中の発言の価値付けや、クラスの授業態度を根気強く指導していきたいと思います。また、クラスのまとめ具合は、授業時間だけではなく、休み時間、行事など様々な時間を経て培われていくことが分かったので、授業の時間以外では児童と思いっきり楽しむ時間を作りたいなと思いました。

## 5. 教職の魅力発信におけるコンテンツ開発

# 教員の魅力を発信する映像コンテンツの制作～高大接続の取組～

横浜市教育委員会 大平はな、佐藤龍成、柳澤尚利、山本朝彦

## 1 背景

教員採用試験倍率が減少する中、人材の確保が本市の課題となっています。

教職員育成課 養成チーム（大平・佐藤・兵頭・鈴木）は、この課題に対し、54の大学等との連携、教育実習、よこはま教育実践ボランティア、大学生の学校インターンシップ、よこはま教師塾「アイ・カレッジ」、採用前研修等の取組をとおして、教員の魅力を発信し、教員を目指す学生の養成に取り組んでいます。

令和元年度は、本市が連携している大学と共に、学校教育の魅力や大学の育成の様子を発信し、教職に興味がある高校生や大学生、よこはま教師塾「アイ・カレッジ」塾生や現役の教職員と情報共有し、交流を深めることができる、取組発表会を開催しました。大学生51名、高校生7名を含む約250名の方が参加し、高校生からは「実際の学校現場の様子が分かり、教員の仕事っていいなと思った」「教員になるためにはどのようなプロセスで、何を学んでいけばよいか分かり、ためになった」といった声が寄せられました。

この取組から、できるだけ早い時期から教職への関心をもってもらうことが、本市の課題解決につながる一つの方策となるのではないかと考え、令和2年度は、中学生・高校生を対象とした、教員の魅力を伝える映像コンテンツ及びリーフレットを横浜国立大学と共同で制作しました。

## 2 映像コンテンツ「先生になりたい～高校生の教師体験記～」について

### (1) 登場人物等

主人公となる高校生「みさきさん」は横浜市立東高等学校3年生、動画の舞台となる小学校は横浜市立寺尾小学校です。動画には他にも、主人公となる高校生の小学校時代の恩師、4月から横浜市内の小学校に着任する横浜国立大学の4年生も登場します。

### (2) 主な場面と動画作成の意図

#### ○1：教師体験 スタート！（児童との触れ合い、図工の授業のお手伝い、メンター研への参加）

教員が常に様々なことに配慮しながら授業を進め、児童一人ひとりに対し、きめ細やかに声掛けを行っていることを、高校生なりに捉えてもらうため、「ミニ先生」として第1学年のある学級に数回関わる場面を設定しました。児童の下校後に、教員が行っていることも体験しました。児童生徒の目線や立場からでは見ることができない、知ることができない多くの準備や会議があることを知ってもらうためです。また、今、横浜市内の小学校は、経験の浅い教員がたくさん着任していることを実感してもらうため、メンターチームの研修にも参加し、多くの教員と語り合いました。

#### ○2：これでばっちり 大掃除！（学年研への参加、大掃除のお手伝い）

事前の準備や会議の大切さを実感してもらうため、実際に大掃除に参加しました。学年研で、雑巾がけの方向やバケツを置く位置等の細かいところまで、綿密に打ち合わせたことで、大掃除当日は高校生もより主体的に動き、児童に声を掛けることができました。チームで学年経営を行い、教員同士が互いに協力して進めることの大切さを高校生なりに捉えていました。

#### ○3：国語の授業に わたしもチャレンジ！

教員の仕事の面白さや難しさを捉えてもらうため、高校生も国語の授業を行ってみました。黒板に字を書くことや小学校1年生にも伝わる説明の仕方は苦戦しつつも、「書けました」と漢字ドリルを見せに来た児童に対し、「上手だね。」「形がきれいだね。」と賞賛の言葉を投げかけることができていました。

○4：わたしが見つけた 教員の魅力 (小学校時代の恩師との再会、教師体験を振り返って)

教員の仕事はかけがえのない出会いに満ちた、未来につながる仕事であることを実感してもらうため、主人公の小学校時代の恩師との再会場面を設定しました。教え子である主人公の成長を誇らしく思う恩師の姿、小学校時代の思い出や恩師から学んだことを語る主人公の姿が収められています。教師体験を振り返る場面では、教員の魅力や仕事のやりがいについて、力強く語っています。動画を視聴する中学生・高校生の興味・関心を高めるよう、高校生目線で発信しています。

3 リーフレット「横浜の先生になりたい～高校生みさきの教師体験記～」について

(1) 仕様

A4版 観音折り (8面)

(2) 内容・構成

①表紙 (1面)

→メインキャラクター「みさきさん」を漫画風で表し、中高生にも親しみやすさを強調

②学校の「先生」ってどんな仕事? (2面)

→教師体験で行ったことをすごろく風で表し、動画とも連動

③教えて「先生」の魅力 (2面)

④知りたい 中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校の「先生」のこと (1面)

→動画内で語られた教員のインタビューを編集

⑤興味をもったら調べてみよう 学校の「先生」になるには (1面)

→横浜国立大学教育学部の取組を紹介

⑥横浜市の取組を紹介 安心サポート (1面)

4 発信方法 (予定)

○全国に広く発信

・横浜市 Web ページ (広報用 You tube を活用)

○本市中高生に発信

・令和3年4月 通知を发出

・Leaf にも掲載

・養成・育成だよりに掲載

○連携大学へ発信

・令和3年4月 通知を发出

・令和3年6月に実施する協議会で取り上げる

・大学訪問で PR 活動

○横浜国立大学経由で

・本市以外の高校への PR 活動

資料：動画の一コマ





# 教えて「先生」の魅力

たくさんの方からアドバイスをいただきました!



## 学年主任から

「先生」という仕事は、子どもの一生に携わることができるとても素敵な仕事だと感じています。楽しいことだけではなく、子どものことや授業のことで悩むこともありますが、そのような時間も全て子どもの成長につながる時間だと思っています。

悩んだ時間も

一生懸命取り組んだ時間も

全て子どもの成長につながります

# 先生は つくる

## つばさ先生から

初めて小学校1年生の担任をもちました。学級目標「にこにこいっぱい大作戦」の達成に向けて、子どもたちはすくすく成長してきました。困っている友達を助けてあげようとして、優しい声掛けが広がったりしているのを見ると、「子どもってすごい」「子どもって素敵だな」と心から思います。



毎日子どもたちからパワーをもらっています



## 校長先生から

今、横浜市の学校では、経験の浅い教員が増えています。どの教員もみな毎日一生懸命授業を行い、全力で子どもたちと関わっています。困ったことがあると、同じくらいの世代の教員で助け合ったり、アドバイスし合ったりしながら、教員として更なる成長を遂げています。みなさんも、次世代の子どもたちと向き合って、未来をつくっていきませんか。

自分の仕事に誇りをもち  
子どもたちに全力で  
向き合っている

「先生」ってカッコいい！



# 未来を 仕事です



一番身近な存在として  
子どもたちの変化や成長を  
サポートしたい

## もうすぐ教員として働く 大学生から

大学では、教員になるために真剣に学んできました。それでも、4月から教員として、しっかり働いていけるだろうかという不安な気持ちでいっぱいです。校長先生から、何か困ったことがあれば、「困っています。助けてください。」と自分から声をあげることの大切さを教えていただきました。職場のみなさんに教えていただきながら、子どもたちの成長をしっかり支えていきたいと思っています。

## 小学校のときにお世話になった みさきの恩師から

自分が教え、関わった子どもたちが大きくなり、自分の夢や目標に向かって一生懸命頑張っている姿を見ると、本当にうれしく思いますね。教員の仕事の魅力は、かけがえのない「出会い」に満ちているところだと思っています。



動画はコチラ







横浜市の  
取組を紹介

# 安心サポート



先生って忙しいのかな？  
研修や休暇など、どんなサポートがあるのかな？  
私が住んでいる横浜市の取組を教えてくださいました。

先生として安心して  
働いてもらうための  
取組を紹介します。

## 「働き方」をサポート

横浜市教育委員会では、平成30年3月に「横浜市立学校教職員の働き方改革プラン～先生のHappyが子どもの笑顔をつくる～」を策定しました。職員室業務アシスタントが配置されたり、留守番電話が設定されたりするなど、教職員が生き生きと働けるような様々な取組を推進しています。



## 成長と学びをサポート

横浜での教員生活を安心してスタートできるように、教員として着任する前から懇談会、採用前研修(オンライン相談会)、配属予定校での面談等を実施し、サポートを開始しています。希望者は、横浜市内の学校で採用前のボランティア活動も行っています。そして、教員として1～3年目は横浜型初任者育成研修をとおして、校内・校外で学び続け、教員としての基礎を固めていきます。



### みなきメモ

先生として学校に入る前から、そして、入った後も、様々な学びや研修をとおして、ステップアップを回っているのです。



採用前研修  
オンライン相談会



初任者研修(令和元年度・2年度)の様子

## そのほかにも…

教職員がいきいきと働くために、  
ほかにも、教職員の休暇などがあります。  
休暇などには右のようなものがあります。

- 年次休暇
- 病気休暇
- 夏季休暇
- 結婚休暇
- 出産休暇
- 服忌休暇
- 社会貢献活動休暇
- 介護休暇
- 男性職員の育児参加休暇
- 配偶者の出産のための休暇

## 入職後の教員の困難さを緩和する要因

横浜国立大学大学院高度教職実践専攻 脇本健弘

本章では、経験の浅い教員の困難とそれらを乗り越えるためにどうすべきか、横浜市教育委員会との共同研究の成果や学びに関する理論をもとに考えていきたい。

まず、経験の浅い教員がどのような困難を経験しているのか、経験3年目までの困難経験に関する調査をもとに報告を行う。横浜市の公立学校に所属する2017年度採用の全教員を対象に行った3年間の縦断調査で、成長やつまずき、職場環境などについて質問している。ここでは、困難に関する項目として、授業や学級経営、保護者対応や同僚との関わりなどについて、1～3年目にそれぞれどの程度経験したのか、5件法（5：あてはまる～1：あてはまらない）で質問した調査結果について、小学校・中学校に関してそれぞれ報告を行う（脇本ら2021；木村ら2021）。

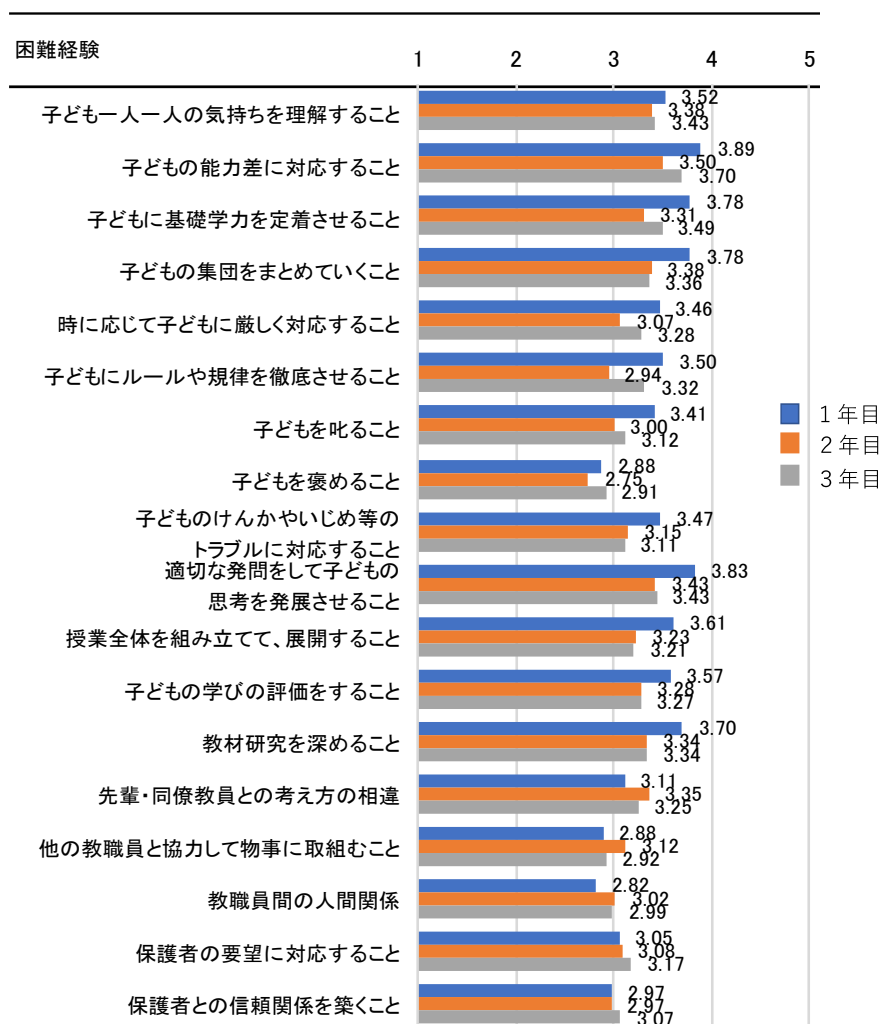


図1 小学校における困難経験

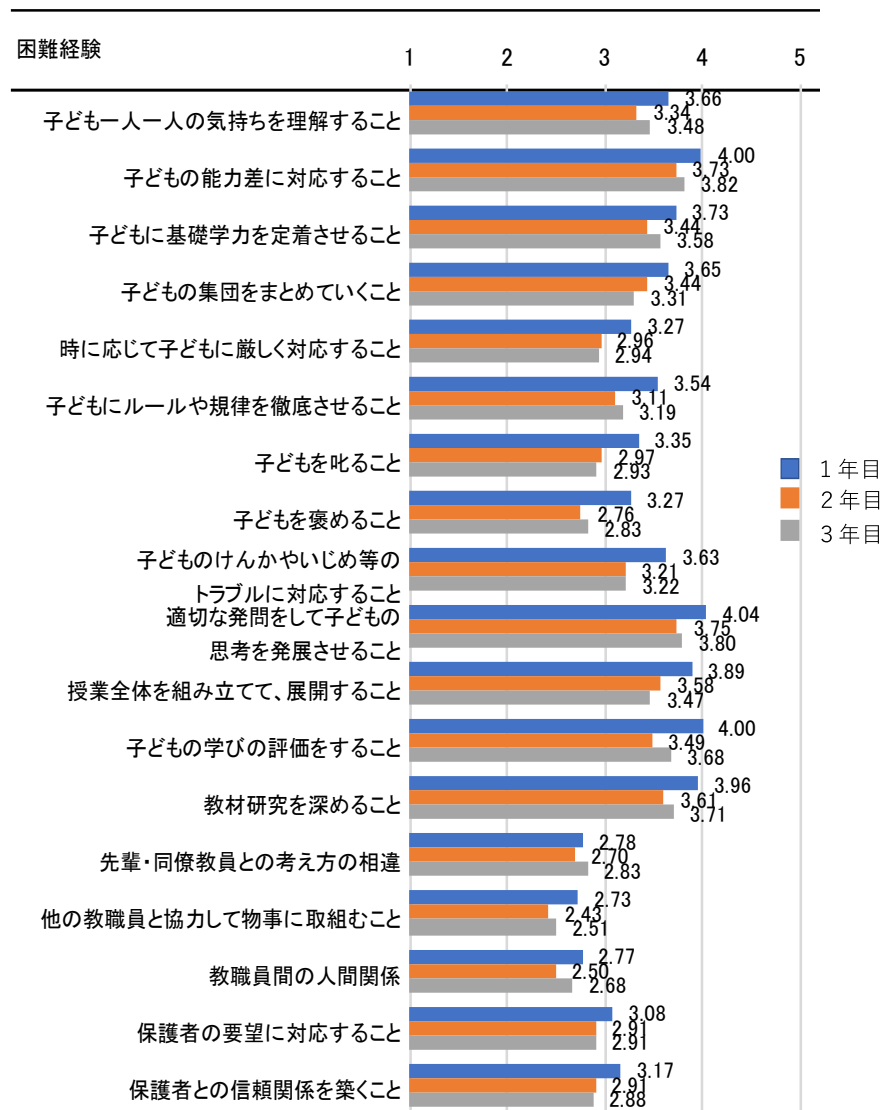


図2 中学校における困難経験

図1は小学校、図2は中学校における困難経験を示している。授業や学級経営、子どもへの関わりなどは小学校、中学校、共に傾向が似ており、授業や個々の子どもへの関わりに関する項目の値が高い傾向にある。また、年数を経るごとに値が減少するとは必ずしも言えず、むしろ多くの項目は、3年目に増加傾向にあり、U字カーブを描いている。この結果については、様々な理由が考えられる。例えば、1年目の課題と3年目の課題が質的に異なることなどが挙げられる。1年目は、教員として、恐らくスムーズに授業などを進めることや基本的な技術を身につけることが課題となり、それらは2年目にある程度落ち着くと考えられる。そのような状態になることで、着任当初と比較すると、少しずつ余裕が始め、これまで見えていなかった課題を認識できるようになるなど、3年目の課題は質的に異なる可能性があり、それが結果に影響を与えている可能性がある。

では、これらの課題を乗り越えるためには、どのような手立てが考えられるであろうか。これまでの先行研究をもとに2点紹介する。1点目は学び方に関する理論として経験学習を、2点目は他者との関わりとしてメンターチームを紹介する。

1点目の経験学習(Kolb 1984)とは、経験を学びに、そして、成長につなげていくための理論である(図3)。経験→振り返り→概念化→試行という形で、経験を振り返り、それをもとに次にどうすべきか、自分なりの方法を考え、それを実際に試し、日常に取り入れ、また新たな経験を積んでいくということを繰り返すことで成長するというプロセスである。 脇本・町支ら

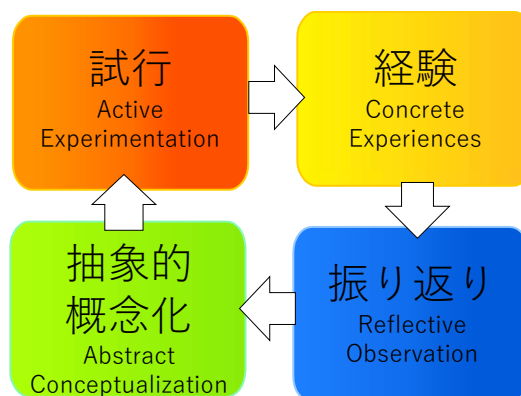


図3 経験学習

(2015)によると、経験学習における各プロセスが教員の授業や学級経営の効力感にポジティブな影響を与えていることが示されており、課題の解決に寄与することも考えられる。1年次においては、まず授業等を成立させること、スムーズにできるようになることが課題になるかもしれないが、長期的視野で自分の成長を捉えるのであれば、経験学習の習慣は重要になってくると考えられる。

2点目のメンターチームは、「複数の先輩教職員が複数の初任者や経験の浅い教職員をメンタリングすることで人材育成を図るシステム」(横浜市教育委員会 2011)であり、横浜市で実施されている取り組みである。困難な課題を自身ひとりの力で乗り越えることも時には必要かもしれないが、課題を他者と共有し、解決に向けて共に探究していくことも重要である。1人で抱えむことでバーンアウトし、教員を続けることが難しくなってしまう事例の報告は枚挙に暇がない。メンターチームにおいては、参加している経験の浅い教員が、自身について自由に話をし、時に先輩教員の体験談を聞きながら学ぶことで、自身の課題解決に寄与していることが明らかになっている(脇本ら 2015)。1点目の経験学習につながることであるが、これは、チームでお互いの経験を共有し、振り返り、次の手を考えていくというプロセスに近く、チームでの経験学習といえる。

#### 参考文献

- 木村充, 高木まさき, 脇本健弘, 野中陽一, 泉真由子, 結城菜摘, 鈴木紀知, 柳澤尚利(2021) 中学校教員の採用3年目までの効力感と困難の変化 ～横浜市立中学校を対象とした縦断調査～. 日本教育工学会 2020年度春季全国大会大会講演論文集, 193-194
- Kolb, D.A. (1984) *Experiential learning: experience as the source of learning and development*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall
- 横浜市教育委員会 (2011) 「教師力」向上の鍵—「メンターチーム」が教師を育てる, 学校

を変える！．時事通信社

脇本健弘, 高木まさき, 木村充, 野中陽一, 泉真由子, 結城菜摘, 鈴木紀知, 柳澤尚利 (2021)

小学校教員の採用3年目までの効力感と困難の変化～横浜市立小学校を対象とした縦

断調査～．日本教育工学会 2020 年度春季全国大会大会講演論文集, 195-196

脇本健弘, 町支大祐, 中原淳 (2015) 教師の学びを科学する．北大路書房.

## 6. 養成・研修の一貫化に向けて

## 養成・研修の一貫化に向けて

### -養成・研修の一貫化に向けた教職大学院の改組と深化-

横浜国立大学大学院高度教職実践専攻長 倉本哲男

#### (1) 教職大学院の目的

教職大学院の使命とは、近年の教育現場の抱える問題の多様化、複雑化、深刻化、さらに、学校現場の多忙化や教師間の同僚性の弱まり等の状況改善に資することにある。そのためには、学校現場と大学の双方向的な融合によって、「研究者の学術知」と現場「教師の実践臨床知」から新たな知を創出し、「理論と実践の融合・往還」をなす高度職業人を養成することが肝要である。よって、本教職大学院の理念及び目的は、「高度の専門的な能力及び優れた資質を有する教員の養成」という趣旨に基づき、以下の3点をあげることができる。

- ① 学校教育に関わる「理論と実践の往還・融合」を基本とし、理論の応用並びに実践の理論化に関わる諸能力の修得によって実践的指導力を備えた教員を養成する。
- ② 一定の教職経験を有する現職教員に対しては、確かな指導理論と実践力・応用力を備え、指導的役割を果たし得る教員を養成する。
- ③ 大学院を実践的なキャリアアップの場として位置付け、学校・地域及び教育関係諸機関との連携を生かしつつ、教師教育の更なる質的向上を図る。

更に、教職に関する高度な専門性を有し、同僚性を構築あるいは活性化させ、学校や地域が抱える諸課題に対して中心となって活躍できる次のような人材の養成・育成を目的としている。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 学校や地域が抱える教育課題を認識かつ分析し、適切な教育・研究資源を活用しつつ、教員相互の同僚性を構築あるいは活性化して、課題解決のプロセスで学校や地域のリーダーとして活躍し、自らも成長する中核的中堅教員。</li><li>② 実践者として学び続けることと研究能力を身に付けることを通して、自ら教育実践上の問題を発見し、その解決に努めるとともに、学校経営の視点も自覚しながら、同僚性を支える一員として、新しい学校づくりに積極的に参画できる新人教員。</li></ol> |
|---|

## (2) 教職大学院における「学校実習」（教職専門実習）のねらい

教員の資質能力を向上こそが最重要と指摘され、中央教育審議会答申（H27）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」等の提言を踏まえ、以下の図のように「教員の養成・採用・研修」を通じた一体的改革が推進されている。



そこで、国家的な教員政策である教職大学院においても、当然のごとく「教員の養成・採用・研修」の一翼を担うのであるが、その取り組みの一つが、「理論と実践の往還・融合」を推進する「学校実習（教職専門実習）」（以下、学校実習）である。

## (3) 教職大学院における「学校実習」の主な特徴

教職大学院における学校実習は、学部段階での教育実習とは質及び量の両面において明確に異なるものであり、そのテーマ・目的、内容・方法が明確に計画されている。（学部新卒学生等の学校実習については、現在、県・市自治体で実施される初任者研修の内容との整合性・関連性に留意したカリキュラムであることが望ましい。）

また、学部段階における教育実習生の指導を担当させるなどの工夫により、自らの知識・技能の定着を図るとともに、他の教員に対する指導・助言に関する力量の育成を図る契機とし、これを通じて即戦力としての力量の形成を図っていく。学校実習を行う院生個々の指導力の向上はもとより、広く地域の学校教育の改革を目指す実践的価値の追求が、学校実習の在り方の理想像とされている。



つまり、学校現場における明確化されたテーマ・目的に向けて計画(Plan)・実施(Do)することから、その評価(Check)・改善(Action)のPDCAサイクルを通して、教職大学院における教育・研究の展開にとっても、実践的・学的意義があることがポイントとなっている。

#### (4) 実習校（連携協力校）の設定

実習校は多くの場合、附属学校、または連携協力校となるが、実習を行う院生への指導体制、及び実習に関する教職大学院との連携体制など、十分な指導体制が取れるように、個々の職能成長課題、及び、研究課題に最大限に配慮したオーダーメイドの学校実習を実施している。

本教職大学院では、連携協力校の選択スタイルは、一校に限定する固定式ばかりではなく、学修ニーズ・状況に応じて協力校を変更する移動式スタイルも設定している。本学の実習形態は多様であり、一般的な学校実習に加え、「メンタリング実施研究」「チームメンタリング実施研究」等、学生の個別ニーズに対応して「学生が学びたい実践事項を学べる実習システム」を導入している。

令和3年度～横浜国立大学教職大学院連携協力校等一覧

小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	その他の施設
横浜市立 井土ヶ谷小学校	横浜市立 寺尾中学校	多摩高等学校	中原養護学校	神奈川県立総合教育センター
横浜市立 大岡小学校	横浜市立 港南中学校	橋本高等学校	相模原中央支援学校	横浜市教育委員会
横浜市立 桜台小学校	横浜市立 六浦中学校	伊志田高等学校	金沢養護学校	川崎市総合教育センター
横浜市立 瀬ヶ崎小学校	横浜市立 仲尾台中学校	湘南台高等学校	茅ヶ崎養護学校	
横浜市立 戸部小学校	横浜市立 松本中学校	鶴見総合高等学校	附属特別支援学校	
横浜市立 名瀬小学校	横浜市立 本宿中学校	光陵高等学校		
横浜市立 保土ヶ谷小学校	横浜市立 汲沢中学校			
横浜市立 本町小学校	横浜市立 洋光台第二中学校			
横浜市立 三ッ沢小学校	横浜市立 青葉台中学校			
横浜市立 南太田小学校	横浜市立 軽井沢中学校			
横浜市立 仏向小学校	横浜市立 中田中学校			
横須賀市立 浦郷小学校	横浜市立 日吉台西中学校			
附属鎌倉小学校	川崎市立 宮前平中学校			
附属横浜小学校	横須賀市立 大津中学校			
※神奈川県4事務所所管小学校選出	附属鎌倉中学校			
	附属横浜中学校			
	※神奈川県4事務所所管中学校選出			

(参考)	所管	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
連携協力校の調整の状況	神奈川県教育委員会	40名の実習受入について、調整を行う			
	所管 神奈川県	状況に応じ選出	状況に応じ選出		
	： 県西事務所（10自治体）	1校選出承諾済	1校選出承諾済		
	： 県央事務所（大和市）	1校選出承諾済	1校選出承諾済		
	： 中事務所（平塚市、伊勢原市）	1校選出承諾済	1校選出承諾済		
	： 湘南三浦事務所（茅ヶ崎市、藤沢市）	1校選出承諾済	1校選出承諾済		
	： 横須賀市	浦郷小学校	大津中学校		
横浜市教育委員会		30名の実習受入について、調整を行う			
川崎市教育委員会		10名の実習受入について、調整を行う			
相模原市教育委員会		10名の実習受入について、調整を行う			

#### (5) 教員養成・育成スタンダードの反映

特に、学部新卒学生等については、学部段階において修得した教員としての基礎

的・基本的な資質・能力とともに、教職大学院において履修した教育理論を実務的な経験を通じて実践に融合する機会であることから、実習の計画においては、各領域をある程度網羅することが望ましいと総括できる。



(図. 横浜国立大学教職大学院教員養成・育成スタンダード)

よって、本学教職大学院では、eポートフォリオと教員養成・育成スタンダードを設定している。ICT環境整備を進めた最先端の施設設備や教員養成において必要な機材を積極的に導入し、実習や各科目の学修フレキシションを、デジタルで蓄積するeポートフォリオシステムが最大の特徴となっている。また、本学が開発した「横浜国立大学教職大学院教員養成・育成スタンダード」は、全国の教員育成指標の開発ブームの先駆けと自負しており、現在では学部・教職大学院の全教育活動において徹底活用されている。よって、本eポートフォリオは、その育成スタンダードに基づいて設計されているため、修了まで常に目的意識をもって「自らの学び」のモニタリングをより可能としている。

## (6) 結語 (養成・研修の一貫化に向けた教職大学院の深化とは)

既述の論調に基づき、本教職大学院が達成すべき成果 (養成・研修の一貫化に向けた教職大学院の深化) は、以下の3点に整理できる。

- ①年間の学習によって、高度な専門性を習得した「高度専門職人材」の育成を実現することで、神奈川県内の学校改善・授業改善に貢献する。【高度専門職人材の育成拠点】
- ②課題研究と実習科目との連動によって、実践的有用性の高い「先端知識を生成」し、その知識を、教職大学院研究発表大会や学会において報告し、国内外、及び、地域社会に還

元する。【先端知識の生成拠点】

③神奈川県内各教育委員会及び各教育センターとの連携協働を通して、神奈川県内の様々な「教育改革」課題を共同で探究し、改革案を提言する。【神奈川の教育改革拠点】

これまで全国では54大学の教職大学院が設置されてきたが、令和2年度段階では、それらの半数以上の教職大学院を含む教育学研究科が再編されている。つまり、教科教育・特別支援教育等の定員を移行しての拡大、或いは、修士課程を全面廃止して教職大学院への一本化等による組織再編によって、我が国の「新教職大学院」における教師教育・教職研修は新たな充実期を迎えたと総括できよう。そこで、「理論と実践の融合・往還」の視点から、全国の主要な「新教職大学院」の各科目（静的）と実習（動的）カリキュラム、及び、それらの具体的な指導方法を開発することは喫緊の課題となる。

よって、「養成・研修の一貫化に向けた教職大学院の深化」の観点からも、「教職タレント発掘キャラバン-ダブルインターンシップを軸にした教職キャリア形成の促進-」のプロジェクトは、本学「新教職大学院」の改善・発展にとって有意義な示唆を得ることができる。

特に、令和3年度は第3期中期目標・中期計画の最終年度となり、「県下教育委員会、校長会・教頭会等との密接な連携協力を推進し、教育研究を一層発展させ、地域の教員養成の中核としての役割を果たす」ことを主眼とする。また、「令和2年度監事監査意見書」によれば「提示された新教職大学院の中長期ビジョンは、今後の教職大学院の運営の指針」となり得る。更に短期 vision 的には、本事業を「新教職大学院」の運営委員会のFD企画と位置付け、その情報を組織的に発信することで「学内認知」を促進し、徐々に本学の「指導観の醸成」「指導の質的向上」を図る事も可能であろう。

以上のことから、本プロジェクトの流れに位置づきながら、今後とも、教職大学院の発展に寄与する活動を継続・発展させていきたい。